

506
138

03



始



36.5.11

文藝夜話

宇野浩二著



金星堂版



文
藝
夜
話

宇
野
浩
二
著



目次

文藝閑話休憩

- 一 大阪行——私の思出の町——早稲田大學の友——齋藤青羽——二人の怠惰な學生——同人雜誌の事——大阪の五十日——相馬政之助——エルレエヌとコツペエ——芝川廣とのめぐり合
- 二 トゥルゲネエフの散文詩——「時」に恨みの數々——象徴主義の研究——世紀末思想——養豚事業その他——十年間の旅行
- 三 中央公論と時事新報と新文學——編輯者に心を許すな——早稲田と三田——十年前の文壇——三宮朽葉——本流と支流の事——人間社
- 四 鍋井克之の小説——新しい人と古い人——昔の良妻と今の良妻——三十歳と二十歳——島田清次郎——菊池寛——克之の小説と或人の話
- 五 歌劇女優河合澄子——早稲田劇場の舞臺——六年前の女——田端の永瀬

義郎の家——廢頹派の家——女優志願の女——新時代の先觸

六 あゝ頃のこゝと——福士幸次郎——彼と今井白楊に就いて——さ迷へる幸

次郎——彼の詩と論文——増田篤夫の福士幸次郎論

七 私の少年時代——文學といふ仕事——佐藤春夫の「殉情詩集」——陰氣過

ざる文學——ラフオンテンと七五調——詩歌は文學の古里

隨筆 雜篇……………二一九

勞働祭の日……………二二三

或る夕方……………二二三

東方優勝會の日……………二四二

旅の日記……………二五七

友達の印象……………二七三

佐藤春夫……………二七五

谷崎精二……………二八二

江口 渙……………二八九

野 依 秀 一……………二九七

廣 津 和 郎……………三〇三

舟 木 重 信……………三二二

廣 島 晃 甫……………三二五

論……………三二七

十年文壇事始……………三二九

一月評といふもの……………三三九

一 私の月評に就いて……………三三三

一 若山牧水の歌……………三四三

一 隣人江口渙……………三四九

一 里見弴の作品……………三五八

一 芥川龍之介に就いて……………三六五



文藝閑話
休題

一 相馬泰三と批評家……………	二七〇
一 泰三の作風……………	二七三
一 岡本一平……………	二七九
葛西善藏論……………	二九〇
近松秋江論……………	三三二

大阪行——私の思出の町——早稻田大學の友——齊藤青羽——二人の怠惰な學生——同人雜誌の事——大阪の五十日——相馬政之助——エルレエヌとコツペエ——芝川廣とのめぐり合

此間私は友達に誘はれて大阪に行つて來た、その前に私が行つたのは四年前のことである、その時はもつとも二日しかるなかつたが、その前に行つたのは又三四年前だつたらう、そしてその時も一日か二日程しかるなかつた。だから、大阪は近頃の私にとつて、私がこの一二年以來時々原稿などを書きに出かける、生れて初めて行つた片田舎の温泉町等よりも餘程馴染の少ない町になつてしまつた。何故私がこんな事を言ふかといふと——それは私が子供の時分二十年近く住んでゐた所だし、従つて中學の教育もそこで受けたのであつた。ところが、此間私は友達と行つた時、その時も、僅か二日か三日程しか滞在しなかつた

上に、始終友達と一緒に宿屋にばかりごろごろしてゐたので、殆ど町を見ないで歸つて來たのであつた。だが、唯一度、私は一寸した用事のために、二三時間友達と別れて、町を歩いたことがあつた、その用事は大阪を離れた四五里先の郊外の町に、人を誘ねて行くことだつたので、三時間では極めて忙しいのだつたが、それにも拘らず私は、一人になつて町を少しばかり歩き出すと、その三時間の中で用事の爲の時間をなるべく少なくして、その邊の町々を思ひ付くまゝに歩いて見たくなつたのである。或町は、私が少年の時分に、急に家がそれまでの學校から一里も離れたところに引越した爲に、まだ電車のなかつた時分のことで、私が泣き泣きその一里の道を毎朝歩いた所の一つであつた、又或町は、稍々大きくなつた私が、心の中で密かに慕つてゐた女を、その女が私の住んでゐた隣の家から、ずつと離れた方の或色町に、今考へて見ると誰かの多分妾にでもなつたのだらう、煙草屋になつて引越して行つた、そこへ必ず一週間に一度くらゐづゝ、少年らしい感傷的な心持を抱いて歩いて行つた、その時の町筋の一つであつた、曰く何、曰く何……。

どこの町、どこの都でもさうであらうが、私の斯くも愛する大阪もやつぱりその通りで、といふのは私がそこを去つてから、百萬圓の公會堂が出来たり、カフェー・パウリスタの大きな建物が立つたり、千日前が電車通りで眞二つに割られたり、所謂町の目抜の場所は驚く程變つてしまつたが、一度足を裏町に入れると、誰かの本の中の言葉ではないが、二十年前に子供の私が通つた時の見覚えの、一つの壁や、一つの溝さへ、そのまゝに残つてゐるのを見出すことが出来るのである。ところで、此間、さうして私は梅田の停車場の近くの、或裏町を歩いてゐた時、やつぱりさういふ、私の記憶の時代と少しも變つてゐない町を發見したのであつた。そこで、私が話さうとするのはこれからなのである。

それは今からざつと十年前のことなのである。その時私は早稲田大學の文科の大變意け者の學生であつた。その時私と、私よりももつとであつたかと思へる、同じやうな意け者で、私の友達で、齋藤青羽といふ男があつた。彼は自由詩社（人見東明、福士幸二郎等が起した、所謂自由詩といふものゝ運動をした一團である）の一人で、中々の才人であつた、

だが、私はこの友達の詩を三つ以上見なかつた。彼は學校にも大抵出なかつた、私も大抵出なかつたから、長い間私は同じ組でありながら彼の存在を知らなかつた。が、或時私は教科書を忘れたので、偶然隣席にゐた彼に、失敬だが、僕に半分見せてくれませんか、と教室で言つたのが、私と彼とが交際した最初の言葉だつた。すると、青羽は、僕はこの時間には教室にゐません、この次の時間に又出ます、だから、すつかり御覽なさい、と言つて、もう教師が現はれてゐるのに、その時の教師は忘れもしない片上伸先生だつた、彼は鹿爪らしい用事のあるやうな顔をして、さつさと教室を出て行つたのである。そこで私は彼の本を獨りで専有しながら、教師の講義が終つて、學生の輪講の時になると、退屈なまゝに何といふ譯なく、バラバラと本の頁を前の方を繰つたり、後の方を開けたりしてゐるうちに、ふと或頁の端に鉛筆で、中々巧みな筆蹟で、いたづら書がしてあるのを發見した。見ると「悲しき日の夕べには入日をながめ、古りし日の古りし歌をもうたひにき」と二行に詩のやうな文句が書いてあるのである。

「悲しき日の夕べには入日を眺め、古りし日の古りし歌をもうたひにき、」といつの間にか私もその文句を宙で覚えてしまつた。そこで次の時間の時、彼にその本を返す時、これ君の詩ですか？と私が聞くと、彼は顔を赤めて、いや、いやと言つて、そのいたづら書きの上を鉛筆で縦横無盡に消してしまつた、彼が十八歳で、私が二十歳の頃だつた。そして私は彼と友達になつたのである。先にも言つたやうに、彼も私も一ヶ月に二度か三度程しか學校に行かなかつた。そして終には彼も月に一度も行かなくなり、私も一度も行かなくなり、そして彼も私も學校から免狀をもらはなかつたのであつた。が、そんなに怠け者で、そんなら、その代り、お互に末は文士になりたいつもりであつたのだから、せめて切々と文章でも書いてゐたかと言ふに、それもしなかつた。が、感心な事には、私たちは互に別れてゐる時は、互に思ひ思ひの本を讀んだものだ。本を讀んでゐない時はどちらか尋ね合つて、會ふと文學の話ばかりして、煙草をすつて、茶を飲んだ。……だが、私が今話さうといふのはこんな事ではないのである。

その時分、大阪に雑誌を出す金を出してやらうといふ人が現れて、そこで私は青羽を誘ひ、その外二三人の友達を呼んで、私たちの同人雑誌の一號を出したことがあつた。ところが、その一號が出ると直に發賣禁止になつて、發行人の名前を出した人が裁判所にまで引出されたのである。その裁判所は大阪の裁判所であつた、そして四十圓の罰金を宣告されたのであつた。そのお蔭で、金を出してくれてゐた人も、やつぱり親がりの身分だったので、親が怒つて二號の雑誌の金は出してくれさうにないことになつた。が、元よりそんな事は豫期しなかつたから、私たちの二號の爲の原稿は既に印刷屋に廻してしまつたので、その印刷屋も無論大阪だつた、そこで私たちは相談して、そして私と青羽とが、一方金を出してくれる人に泣きつくと共に、ごたくの爲に印刷が遅れないようにその監督を兼ねて、大阪に出かけて行つたのである。その時青羽と私とが、これはひよつとすると滞在が長くなるかも知れないと言ふので、友達の紹介で下宿したのが、先に言つた梅田の停車場の直近くの、或裏町だつたのである。それが今から十年前のことなのである。

此間、私とその家の前を通つて見ると、變つてゐたのは表札だけで、入口の直横手に塵溜の黒塗りの箱があるのも、その家の左横の前の電信棒が傾いてゐるのも、隣家の塀の上に松の木がのぞいてゐるのも、すべて十年前、私が青羽とそこをさ迷つた頃と少しも變りのない景色であつた。私たちが出かけて行つたのは何でも四月の始めか、三月の終り頃のことだつた、私も青羽も、適當な羽織がなくて、二人とも紺緋のぶくぶくの綿入羽織を着てゐたことを覚えてゐる。が、私たちが學校を無視して、親の目をくゞつて、遊學地の東京から、大阪三界の、そんな素人下宿で二ヶ月以上過ぎしたにも拘らず、目的の雑誌の二號は到頭出さずじまつたのであつた。が、どういふ理由でだつたか、唯何といふ譯もなく、多分旅費がなかつたり、ある時は汽車に乗る氣がしなかつたり、そんな事で、雑誌の方が駄目と定つてからも、なまけ者でぐうたら者の青羽と私とは、のんびんくらしとそこで暮したのに違ひなかつた。始めにその下宿を友達に世話されて行つた時、部屋がないと言つて斷られたのを、再三頼んで、その家人が住んでゐる、八疊の部屋を後で手を入れて障

子を嵌めて二つに仕切つた、その一つの方をやつと明けてもらつて、そこに一人前一ヶ月十四圓で置いてもらつたのであつた、その前金をこしらへるのも中々難儀で、やつと二人で一人前だけの前金を拂つて勘忍してもらつたことを覚えてゐる。

さういふ次第だつたから、青羽にしても私にしても、毎日毎日何もすることがなかつた。私が、その頃から朝一度目を覺ますともうどうしても眠られない性分になつて、朝の六時頃にふと目を覺ますと、同じ床の中に寝てゐる青羽が、二分心の置ランプの光でまだ何か本を讀んでゐるのだ。君は昨夜も到頭眠られなかつたのか、と私が聞くと、うんと彼は物倦さうな返事をした、彼は不眠症に罹つてゐたのだ。そこでランプを消して、戸を開けると、朝の光が一ぱいに部屋の中に這入つて来る。そして私と青羽とは朝飯を食ふ。そして青羽は寢てしまふ。私は彼の枕元で本を讀んで、晝飯を一人で食つて、又本を讀む。すると、青羽が三時過になつて目を覺ます。それから二人で夕飯を食つて、夜になると、私たちは町の北の端であるその下宿から、南の端である道頓堀までてくてくと歩いて行つて、

珈琲を二杯づゝ飲みに行つたものである。そして十二時頃歸つて来て、私は寢る、青羽は本を讀む、——さういふ日を五十日以上私たちはくり返したのであつた。

その頃大阪に、私たちが紹介された友達に、相馬政之助といつて、第三高等學校の法科の學生で、専門の文科の學生より文學書を澤山讀んでゐて、澤山藏してゐる人があつた。若いのに獨逸語と佛蘭西語とそして英語との三ヶ國語に通じてゐた。私たちはさういふ何一つ持たない、而も退屈極まる旅先で、その人から本を借りて讀んだのであつた。相馬君、何々の本を持つて入らつしやいますか、お持ちでしたら拜借したいんですが、と私が言ふと、彼は實に濃厚な人で、はい、と女のやうな聲で答へて、傍に三四本も並んでゐる桐の、普通の着物籠笥の中から（その籠笥の中に彼は本をぎつしりしまつてゐた、適當なのを一冊抜き出して、そして引出しを元の通りにおいて、私のところへ抜き出した本を持つて来てくれたものであつた。私がオットー・ワイニンゲルの「性と性格」の英譯本を初めて讀んだのはこの人にその時借りたのであつた。私はワイニンゲルに興味を持ち出して、外

に何かありませんか、と彼に聞くとその人の外に「ユーベル・デイイ・レットテン・ディング」といふ遺稿集のやうなものがある切りです。英譯をお持ちですか。いや英譯はありません。ぢや、原書は？ 原書ならあります、と言つて、彼は又別の策笥の所に立つて行つて、その引出しの一つから、大形の獨逸書を出して来てくれた。私は讀めもしないのにそれを獨逸語の辭書と一緒に借りて行つて、高橋五郎は獨逸語を睥んでゐるうちに覺えてしまつたさうだ、我等凡庸の徒は睥んだゞけで分らなくても、せめて辭書と首つ引したら分るだらうと思つて、その中のなるべく章の短かさうなのを選んで、辭書を引いても分らぬところは、五郎の眞似をして一時間も一時間半も睥んで見たこともあつた。けれども、結局犬は非常に厭な動物だ、私は犬ほど厭ひなものはない、といふやうな事を書いてあつた章を三分の一位讀んだゞけで到頭斷念してしまつた。

だから、私はそれ程文字通り起居を共にしながら、青羽とは一日のうちで午後三時から十二時迄の間だけ、その時間のうち彼と私とが丁度起きてゐる時間が同じなので、話した

だけであつた。そして私たちが夜分に出かけるカフェーには、相馬政之助も屢々一緒に行つた、そこで私たちは色んな、文學の話をした。その半年程前、私と青羽で、英譯と佛蘭西の原書とを對稱して、無論原書の方は高橋五郎の流儀で、ゼルレエヌの詩の翻譯を百枚ばかりしたことがある。それで私は覺えてゐるのだが、その詩集の始めについてゐる、フランソア・コツペエの序文に、私たちは、即ちゼルレエヌとコツペエとは少年の頃からの友達で、二人は一つの本の頁の上に二つの額を合はせて讀んだ、といった風なことが、名文で書いてあつたのを屢々思ひ出した。實際、私は青羽と屢々さうしたのであつた、私は心の中でひそかに青羽と自分とをゼルレエヌとコツペエに比して考へたものである。その頃カフェーで、私たち、政之助を合はして三人は、如何に若々しい喜びと憧憬とをもつて、私たちの知れる範圍の泰西の文學に就いて論じたことだらう。それ等の詳しいことは省くとして、當時の日本文壇に就いても、無論私たちは唾を飛ばして論じた、草平はそんなに見捨てたものぢやない、僕は彼を小説家として認める、三重吉はい、彼は決して努力し

てなつた文學者ぢやない、(努力してなつた文學者といふ言葉を、當時私たちは輕蔑の代名詞にした)近頃出た同人雜誌の白樺はどうだ、新思潮はどうだ、新思潮もいゝけれど、あの同人のそろひもそろつて藤村模倣なのは厭だね、後藤末雄、大貫晶川、みなさうだね、谷崎潤一郎にまで、あの「麒麟」の書き出しなど確かに藤村の流儀が這入つてゐるね、いや、しかし潤一郎は決してあのまゝのものぢやない、「象」といふ對話體のものなど、僕は大好きだ、スバルはどうだ、一向ふるはないね、しかし僕は好きだよ、僕は外のものは兎に角、吉井勇の歌を何と言つても認めるね、等、等、等。そして無論、「私たち」は草平よりも、三重吉よりも、潤一郎よりも、藤村よりも、彼等を押しのけて文壇に出て雄飛するつもりだつたのだ。

ところで、話が一寸私たちの素人下宿の家のことに戻るが、それは確、芝川廣といふ寡婦が女主人で、彼女とその娘の七歳になるさち子といふ可愛らしい子供との二人暮しであつた。聞くところに依ると、もう一人の上の娘があるが、彼女は北の新地で何とかいふ有

名な文學藝者とかで、英語が出来て、何でも齋藤弔花の愛人だといふ噂であつた、私もそこにゐるうちに、彼女らしい人を二度ばかり見かけたことがある。そして一度弔花が玄關まで来たのもちらと見かけたことがある。齋藤弔花の以前書いたものを、その時よりもつと少年の頃、私も、そして聞いて見ると青羽も愛讀したことがあつた。だから、私たちは、無論もうその頃は彼を中央の文壇から退いた人として、生意氣な文學書生のことだつたから、大いに口では輕蔑してゐるが、心では何となく懐しく感じた、併せてその弔花の愛人の文學藝者をも懐しく感じた、恐らく青羽もさうだつたらう。ところが、その文學藝者は、私たちが大阪を去つてから一二月後に、人傳てに聞いたのだが、亡くなつたとの事であつた。

餘談ばかりしてゐるが、ところで、私たちはさうして、二月もごろ／＼してゐるうちに、東京の友達から學年試験が始まるから、直歸つて來いといふ電報を受取つたのであつた。いくら香氣な、學校を馬鹿にしてゐた私たちも、試験だけは親たちの手前受けて及第しておきたい、と蟲のいゝ事を考へてゐるので、私たちはそこ／＼に旅費をこしらへて、

しかしそれは丁度月の中頃だったので、二人の下宿料として十四圓拂つて行かなければならないのだつたが、それを拂ふと切符が買へなかつたので、後で、東京に歸つたら直に送るといふ置手紙をして、そして東海道を上りの三等列車に乗つたのであつた。その汽車に二ヶ月前に乗つた時とは時候がすっかり變つてゐたことだつた。もう人は皆セルの着物を着てゐた、だのに私たちは二人とも汚れた、垢と汗とで臭さへするかと思へる様な衾に綿入羽織の姿だものだから、私たちは手に手に羽織を脱いで、それを新聞紙に包んで持つた、辨當を買ふお錢もなかつたので、茶ばかり飲んで、新橋に着いたら、もう、梅雨の雨が降つてゐるのだつた。都をば霞と共に出でしかど、といふ光景だね、と私は言つたが、青羽はむつつりしたまゝで笑はなかつた。それ程、東京に着いた時は二人とも氣分が重く、變挺になつてゐたのだつた。

と、これだけが、私が今度大阪に行つて、梅田の停車場の近くの、とある裏町を歩いたに就いての思ひ出である。私は今度大阪から歸りに京都に寄つた。そしてふと京極を通る

と、ある芝居の前に、私が三四年前に知合ひになつた小笠原重亮といふ役者の名前を見出した。その時私は大阪で外の大勢の友達と別れて、芥川龍之介と二人連れになつてゐた。私たちはその晩の十二時の汽車で東京に立たうとしてゐたのだが、その時は丁度九時頃だつたので、時間に餘裕があるまゝに、私は龍之介を誘つて、樂屋から重亮を訪問して、彼の芝居を見せてもらつたものである。すると、私たちが重亮の書生に案内されて、その芝居の棧敷の一間で見物してゐた時、ふと私の後の、廊下に面した板の戸が開いて、一人の年取つた婦人が「暫く、」と言つて、見忘れて狼狽してゐる私に挨拶したのである。「お忘れになりましたか？」と彼女が白い、若い時には屹度可愛らしく見えたに違ひない、大きな齒を見せて笑つた時、私は忽ち思ひ出した。といふのは、彼女が、今言つた、十年前に大阪で私が青羽と共に厄介になつた、あの素人下宿の女主人、芝川廣なのだ。「どうしてこゝに？」と私が驚いて聞くと、「さち子が、あの私の娘が、小笠原さんのお世話で女優になつてゐますので、……もうついでそこへ、」と舞臺を指さして、「腰元になつて出て來ます。今、

私が樂屋にゐますと、あなたがお見えになつたと聞きましたので、……又色々娘が御厄介になるかも知れませんが、何分よろしく、と言ふのである。「あ、今出ました、」とそこで又彼女が無臺を指さしたので、見ると、紫色の腰元の着物を着た、當年七歳だつた、だから今はもう十七歳であるところの、小さいさち子が、今や公衆の前に立つて芝居をしてゐるのである。

「齋藤さんは唯今どちらに？」とその時彼女が聞いた。

「齋藤青羽ですか？」と私、「青羽は今佛蘭西に行つてゐます。……實際彼はその後、私と離れて、外國語學校に改めて入學して、そこで生れ變つた勤勉な學生になつて、佛蘭西語科の秀才として卒業して、目下佛蘭西にゐるのである。」

言ひ忘れたが、昔、私はこの人がお上だつた下宿に十四圓の借金をして逃げたと先に書いたが、東京へ歸つてから直に十三圓だけ送つておいた、何故一圓少なくしたのか、無論金がなかつたからであらうが、そしてそのまゝになつてゐるのである。ところが、今彼女

はその一同の借主の私に、蜜柑などを持つて來てくれたものであつた。そしてその晩、會ひたかつたが、到頭機會がなくて、私は大きくなつたさち子に會はずに別れたのである。——ところで、こゝで私は再び讀者に厚くお詫をしなければならぬことは、今迄書いたことが、總て一つの前置で、私が話さうとする本文 はないことである。

閑話休題——とこれから始まるのである。講談の續きのやうなことをして誠に濟まなかつた次第であるが、そして無論こんなところで文章を切るつもりではなかつたが、どうしても締切の間に合はなかつたので、讀者諒焉。——(九、一二)

トウルゲネエフの散文詩——「時」に恨みの数々——象徴主義の研究——世紀末思想——養豚
事業その他——十年間の旅行

イワン・トウルゲネエフの散文詩に、アルプス山中の高峰、ユングフラウとフィンステラアルホルンの二山が話をする場面がある。何か變つたことがありますか、僕より君の方が眼界が広いんだが、雲の下に何か珍しい事が見えないかい？ とユングフラウが問ひかける、そして數千年が飛び過ぎる。それが唯一息のことで、轟く聲でフィンステラ・アルホルンが答へるには、地の上は今雲と霧とで何にも見えない、一寸待ち給へ、と言つてるうちに又數千年が經つ、やつぱり唯一分の間のことである。そこで、どうです、もう見えるでせう、とユングフラウが促すと、あゝ、はつきりして來た、と他の山が答へるには、別に變つたことはありませんよ、水があつて森があつて石があつて、その中をうろくろくとさ迷

つてゐる二本足の、我々のところへは迎もやつて來たことのない、蟲がうよく／＼してゐるやうです。といふのは人間のことですか？ さうですよ、人間のことですよ。そして又數千年經つてしまつた、やつぱりこれが一分の間のことである、と言つた風な話である。

見らるゝ如く、これは決して餘り嶄新とは思へない比喩話に過ぎないが、それにも拘らず妙に讀む人の心を動かす所以のものは、恐らく數奇を極めた生涯を送つて、六十餘年の老の坂に立つたところの、この冥想癖の詩人が眞に心から感じて、悲しみながら書いたものだからであらう。元よりこの考は考そのものが決して奇抜なものではないが、その代り誰の胸をも打つものに違ひない。これを怨みの言葉で述べると、つまり少年老い易くとか、鐘に怨みが數々ござるとかいふことにもなるであらう。如何なる人も浮世の月の數を多く重ねれば重ねる程、「時」に恨みと未練の數々が重なるものに違ひない、即ちトウルゲネエフはそれをアルプス山に假りて嘆いたものであらう。だが、無論、恨んだつて仕様のない話で、だから、私は恨まないつもりであるが、さりながら今更アルプス山を持つて來る迄

もなく、過ぎ去つて見れば、千年も百年も真に一夢であらう、私の過去の十年なんて、半夢の半夢に過ぎないことである。そこで私は、前章に於いて、洒洒として、阿呆のやうに、十年前の出来事と十年後の有様とを、極めて簡単に無感激な文字でつらねて、さてこれから本文に這入らうとするところで筆を擱いたのであつたが、實のところ、私だつて、恨みこそはしないが、今、私は私だけの貧弱な十年をかへり見て、多少の感慨がないではないのである。そこで再び讀者の寛恕を乞うて、本文に入る前に、もう少し私をして言はして戴きたいのである。例に依つて、何が本文であり、どれが枝葉の文章であるか、頓と分らぬやうなものになるかも知れないが、私にだつて、これで中々言はんと欲するところ、訴へんと思ふところが、なくはないつもりなのである。現に私はこの文章を書くに當つては、論文を書くつもりで始めたのである、讀者諒せよ。

その頃、私は私の若い友達の齋藤青羽と毎日毎日、どちらか一方の下宿をどちらか他方から尋ね合つて、そしてパウエル・エルレエヌの詩集の翻譯に従事したことは、前號で話した

ことであるが、又私たちは屢々議論をした。その頃の私たちの頭の最も多くの部分を占領してゐたものは象徴主義といふ問題であつた。その初めは長谷川天溪の「自然主義」といふ論文集に集められてある、象徴主義の論文に就いてだつた。何でも天溪の説くところに依ると、象徴と比喩の相違は前者は物を直接に現はすことで、後者は物を何か別のものを借りて現はすことで、と此處までは無事だが、それから少し怪しいのである。例へば白といふ色を見ると、吾々は立所に潔白といふことを思ひ浮べる、これ白は潔白の象徴だからである。ところが、狐が狡猾を現はすといふ意味は、狐を見ると、色々の狐に關する事件を思ひ出して、引いて彼が狡猾者であるといふ連想から、彼が屢々狡猾の代名詞にされる、この場合狐は狡猾の比喩である、と言つたやうなことが書かれてあつた。これが青羽にも私にも中々合點が行かないのであつた。どつちにしたつて比喩ぢやないか、象徴といふものは、君、そんな事ぢやあるまい。——そして青羽と私とは明けても暮れても象徴主義に就いて思案を廻らしたものである。當時文壇は自然主義の全盛時代であつた。が、私たち

二十歳の青年は何といふ理由なしに、それに賛成が出来なくて、もつとハイカラな、もつと文學らしい、もつと高等らしいことに憧れた結果、青羽にしても私にしても、その象徴主義といふものに明けても暮れても思をこがしたものであつた。私たちはそのうちに、天溪の象徴主義の論文の意味が曖昧で、よくその意の通じてゐないことを看破したつもりで、結局天溪にはそれがよく分つてゐないのだ、彼の言ふ象徴といふものは悉く比喻の一例に過ぎない、天溪どころか、メエテルリンクだつて、アンドレエフだつて、彼等の象徴主義は皆比喻主義を一步も出てゐない、君、結局象徴主義といふのは主義をなさないよ、これは私が言つたのであるが、兎に角斯ういふ結論に達するのに、私たちは大凡半年もかゝつたものである。

丁度その時分に、「近代佛蘭西詩集」とか「近代獨逸詩集」とかいふ英譯の小型の詩集が丸善に來たものであるが、青羽と私とはそれ等の本の一々の頁を、恐らく彼も私も十二度以上讀耽つたことに違ひない。ボオドレエル、マラルメ、ランバウ、モレアス、ラフオルグ、

ルツテ、カアン、メリル、かういふ名前を私たちは隣人の名前よりも親しく覚えて、一日のうちに何度となく口にしたものである。今は故人になつたが、三富朽葉といふ人があつた。やはり自由詩社の同人の一人で、子供の時分から佛蘭西語に親んでゐたといふ、年は私たちより二三歳しか上ではなかつたが、勉強家で、詩も上手で、佛文學者で、象徴主義の研究者で、私は一二度しか彼の家に行つたことはなかつたが、青羽は屢々彼を訪問したらしかつた。「君、やつぱりさうだよ。」何がさうなんだ？」「象徴主義に就いてだよ。朽葉の話に、グウルモンの象徴派の詩人を論じた文集の序文に、象徴主義といふのは文字通りに解釋すると無意義になるが、それはつまり文學上の個人主義の旗印と見ればいゝ、と書いてあるさうだよ。君がいつか言つた通りだ、君はえらいよ、」と或日青羽が私に言つた。

だが、私たちは下宿のくすぶつた部屋の欄間に蜘蛛が巣を張つてゐるのを見ると、「高い窓の上には蜘蛛の巣が震へてゐる」と節を附けてうたつた、それはステファン・マラルメが詩の句である。又私たちは毎晩ほど顔を合して、そして程近い下宿へ、別れて歸る時には、

どちらかその歸る一方のものが、フランシス・ギエル・グルフィンの「今は別れを告ぐべき夜なるかな」と青羽が譯した言葉を以て、別れの挨拶に代へたものである。何と、他所の人が見たら氣障とも見えたことであらう。だが、私にとつて、それが昨日のことのやうに思へるのである。

その頃、わが文壇には世紀末といふ言葉が頻りに流行つてゐた。そもそも世紀といふ言葉そのものが、人間が假りに便宜上からこしらへた曆の上のことで、それが第何年目に當らうが、子年であらうが、酉年であらうが、地球の上に住む人心に何の拘りがあるとは思へないことであるが、今になつて考へると、批評家の言葉にも、八卦と同じく、千に一はまぐれ當りがあると見えて、確に我國でもその頃は世紀末の思想が流行つたやうである。だが、由來我朝の人心は極めて物に感じ易く、よい事にも悪い事にも多分に摸倣性と雷同性を帯びてゐるから、元よりその類には違ひないが、私たちもその例に洩れなかつた。君の目は馬鹿に、常規を逸して大きいね。これも世紀末である。君はひどく物忘れするね、

神經衰弱だらう。これも世紀末である。君はひどく恐がりだね。これも世紀末である。君は大變疲れてゐるね、どこか悪いんぢやないか。これも世紀末である。折から片山孤村著はすところの、「近代獨逸文學の研究」といふ本を見ると、確か神經衰弱の文學とかいふ表題の、近頃の獨逸の文學傾向を紹介した論文があつた。大袈裟に言ふと、私たちは隨喜の涙を流して讀んだものである。

だが、そのうちに私たちも段々と二十歳を越して來ると、象徴派の文學も、惡魔派のそれも、薄暮情調も、黄金の格子戸も、唯美主義も、それ等に對する若い熱情が薄れた譯ではないが、だが、斯うして文學に浮身を窺して居ても、末はどうなることか、明日から朝早く起きて、切々と早稻田學校に通つたところが、到底確に卒業後に乞食をしなないで濟むことを約束してくれさうにはなく、勉強していゝ成績をとつたら教員免狀をくれるといふ話だが、君、よく考へて見ると、あれは歳暮賣出しの福引見たいなもので、よくく運よくなければ、簞笥や柱時計はくれないんぢやないかね？ と私が言ふと、僕もさう思ふよ。

と青羽も心配さうに、それに文學と言つたつて、いくら才があつても、甲教授や乙教授の家に日参して、彼等に氣に入られて、「早稻田文學」(註、當時文壇に中々勢力のあつた文學雜誌)にでも引立てて貰はなければ、角力や何かと違つて、實力だけでは文壇に出られるものぢやない、と或男が話してたよ。成程さう言へばさ、かも知れないね、して見ると、我々、君にしても僕にしても、こんなに氣が弱くて、その癖高慢で、自分で自分のする事に一寸でも氣がさすと、立所に顔の筋肉が身體もろ共固くなつてしまふやうぢや、とても見込がないよ、やつぱり神經質や廢類派は駄目かね、あれはほんの文學の上だけの話かね、と言ふやうな會話をして、一時間も二時間も氣を腐らして、黙つて向ひ合つたま、舌が爛れる程煙草ばかりくゆらして、終には二人とも變に氣が荒くなつて、喧嘩がしたくなるやうな氣分にさへ誘はれた。

その時分のことであるが、今になつて考へて見ると、何處でさういふヒントを得たものか、誰に教はつたものか、或日私は青羽に向つてこんな話を持ち出した。君、我々の文學

もい、が、何よりも金がなければ駄目だよ、君が不斷から欲しがつてゐる驢馬だつて、金がなければつまり買へないからな、又やつと工面して買ふには買つても、下宿住居ぢや驢馬を飼つておくところがないぢやないか、僕だつてさうだよ、紫のマントも、頭に嵌める金の輪も金なしには手に入れないよ、そして、君、文學は何も早稻田學校などと關係がないよ、現に俺たちはあの學校のクラスの、毎日學校へこつこつ通つてゐる奴の、見渡したところ、どいつよりも俺たちが文學が出来さうぢやないか、文學は何處で何してたつて出来るよ、ところで僕は考へたんだがね、養豚事業といふものをやらうと思ふがどうだ、無論、それには三四人共同でなくちや、資本が纏らないがね、どうだ、君、それには大阪に僕の友達があるから、その方から二人位加勢を得て、東京ぢや駄目だ、大阪の方で始める方がい、んど、と言つたものである。それに忽ち青羽も賛成したのである。

その話は初めに大阪の方の友達と打合はして、そして青羽を誘つたのか、青羽と相談してから彼地の友達を勧誘したのか、それは今はもう忘れたが、とん／＼拍子に話はす、ん

で行つて、幸ひ大阪の友達が二人とも地主で彼等の地面に丁度いゝ鹽梅に、養豚にはなくてはならぬ池の附いてゐるのがあるし、その近くには又豚の食料として最も安價な材料であるところの酒精の絞り滓の出来る會社もある。それから又大阪人は東京人程にまだ豚肉を知らない、何かの本に依ると文明人ほど豚肉を澤山消費するさうだ、されば大阪は豚肉を廣めるのに恰好の土地だ。さうなつたら君と僕と豚の番を兼ねて、二階と下との書齋をこしらへようぢやないか、君は紫のマントを買ひ給へ、僕は長靴を穿くことにするよ。豚は一年に二度而も六疋づゝ子を生む、その六疋が又一年に二度に六疋づつ、その六疋が又一年に二度に六疋づゝ、されば五年もしたら、君、そんなに鼠のやうに殖えた豚をどうしよう、それを皆賣るんだ、十年たつたら僕たちは立派な金持だ。それから文學をやらうぢやないか、それからでなくても、もう二年目位から立派に雜誌位は出せるだらう、雜誌は元より純文藝雜誌だ、豚のことなど一言も書かないやうにしよう、——そしてそれが、諸君、驚くなかれ、皆本當の話なのである。

丁度秋から冬にかけてのことで、その時分は何でも青羽と私とは同じ素人下宿に下宿して居た、そして彼の部屋に置炬燵がしてあつた。その中に足を突込んで、青羽と私とは大きな洋野紙を買つて来て、六疋が六疋、又六疋、それが六疋と、無數に膨脹して行く豚の數を計算したものである。牡と牝と、直に賣ると、残しておくのと、そんな事ばかり六ヶ月も毎日毎日計算して暮したものである。流石にその計算は一時間とつかかないのである。すると、青羽はごろりと仰向けに寝轉んで、神經派と廢類派の文學書を読むのである。私が彼の後をつゞけて豚の計算をする、だが私も直に疲れて、薄暮情調や黄金の格子の文學書を手にとるのである。そして、青羽、今度は君計算しろよ、と促す。うむ、と言つて、しかし青羽はやはり文學書を離さない、私も離さない、六ヶ月目に、それでも、各々國に歸つて、親類や親たちに金を出させることを説いたのであつたが、無論彼も、私もそれぞれ叱られて、再び東京に歸つて來た。東京で二人が會つた時は、もう二人とも豚の話をおそれ、やうに口に出さなかつた。この話の詳しいことは他日に譲らう。

それから半年後には私も青羽も、文學は止めて、晝をやらうと相談した。そして毎日二人でお互にモデルになり合つて顔をかき合つた、但しこれは一ヶ月以内に止めてしまつた。そしてその頃から、どういふ事情からだつたか、彼と私とは下宿も離れたところに引越し、段々に友達も變つたり何かして、いつとなく離れてしまつたのである。……が、斯ういふ話は幾らしても盡きない、だが、それでは餘りに餘談に過ぎるから、その後の私の状態をざつと述べると、無論早稻田學校は怠けた罰で落第して止して、それから一向賣れない翻譯をしたり、お伽話を書いたり、又或時は或本屋と同盟して、その男と一緒に兜町と蠣殻町に出没して、無帽であの町を前場一節、後場一節、引、大引、ドデン、賣買、などと一ヶ月ばかり没頭した末に、相場の本を執筆したこともある。そして元よりそれ等の事はその日その日の風次第で、何の前後の考もなく、無論それを以て身を立てようといふ考でもなく、浮草のやうに、唯日が明けて日が暮れる迄の、普通の人で言はば散歩か、旅行か、將棋遊戯か、それ程のつもりでやつてゐたのであつた。そして私は次の事を言ふことが出

來るのである。と言ふのは、その間にも、さういふ状態であつたから、そこを切り抜けて、どうかして文學を以て身を立てたいと思ひはしなかつたが、だが、文學を読み、文學を愛し、文學に親んで居たことだけは、それは神様が知つてゐることである。——だが、これ等の話も、私がこの文章を書かうと思ひ立つた筋にとつての、ほんの前置か、形容詞に過ぎなかつた、そしてもう一つ考へて見ると、これは私がそのうちに書いて見ようと思つてゐるところの、小説の覚え書きに過ぎないものである。

されば、閑話休題、早い話が、私はこの十年ばかりの間、少し道を踏み間違つて、文學道の瀧壺の底に沈んでゐたものを、どういふはづみでか、ひよつこりと流れの上に浮き上つたと言ふ程のものに過ぎないのである。これを少し大袈裟に言ふと、十年螢雪の苦勞とも言へようが、私には正直のところ、今言つたやうな譯で、苦勞とは考へられないので、寧ろ浦島太郎が少しばかり可笑しな、凸凹だらけの海底旅行をしたくらゐにしか考へられないのである。それを又何故私が浦島太郎を譬に持ち出したかと言ふのに、西洋諸國と違

つて、何と我朝の人心の可笑しさよ、氣まぐれさよ、私が十年海の底を旅行してゐた間に、浦島太郎は三百年といふが、成程、このところ、文壇以外の他所の國に持つて行くと、確に三百年位の變り方をしてゐるのに驚かれる、と言ふやうな感想を述べようと思ひ立つたのである。

近頃、私は四五人の二十歳の青年と會つたのである、二十歳と云へば、私とは十歳位しか違はないのである。現今の文壇に於いて、どういふ小説家がいゝのですか？ とその中の一人の青年が或時私に聞くのである。里見弴などいゝんでせうな、と私が答へると、えゝ、里見弴？ とその青年は目をまん丸く見開いて、全く心から呆れたといふ表情で、私たちの中では里見弴は輕蔑的になつてゐるんですよ、輕蔑の代表者に……(十、一)

三

中央公論と時事新報と新文學——編輯者に心を許すな——早稻田と三田——十年前の文壇——三富朽葉——本流と支流の事——人間社一派

今年の一月、私が中央公論に書いた「或女の境涯」といふ小説は、當局に對する遠慮からだと言ふので、もつとも同誌記者から斷りはあつたが、それで當局に對する遠慮の十分の一も私にはしてくれなかつたと見えて、ひどく伏字をされた事があつた。私は私一個の趣味として、所謂際どい事はなるべく書きたくない流儀で、若しさういふ點で讀者に不快を與へるやうな文句があつたら、甘んじて撤回する考のものであるが、あれは少々伏せ方がひどかつた、と大いに残念に思つてゐる。それに就いて、これは一笑話であるが、或口さがない京童の曰く、あれは多分宇野浩二のことであるから、始めから、何にも書いてないのを、わざと出鱈目に丸々を嵌め込んで、思はせぶりにやつたのだらう、と。阿々。

次いで、同じく一月、私が時事新報紙上に「十年文壇事始」といふ文章を書いた時、その文中に三四行ばかり同紙の記者の氣に觸つた箇所があつて、これは無斷で抹殺されたことがある。便宜上今その内容を打明けると、細田民樹と、人間社新思潮派及び三田文學派などを引合に出して、時事新報と讀賣新聞の兩文藝部に多少物申したのであるが、記者はそのうち己の社の方に關する記事を抹殺したのである。多少残念であつたから、二三日後私は再びそれに就いての斷り書を文章の終に書き附けたところが、やつぱり肝腎のところをもみ消されてしまつたので、到頭泣寝入りとなつた次第である。

ところで二月になつて、今度は新文學(即ち本誌)の出來事であるが、こゝに連載しつゝあるこの文章の、つまり前の章の終りの五行が、これは今迄とは反對に、抹殺の代りに増訂されたことである。その顛末を申し上げると、あの文章の終の五行は確に一度私の書いたものには違ひないのではあるが、丁度あれを書いてゐる時、締切期日が既に二日も前に過ぎたし、如何に隨筆とは言ひ乍ら餘り隨筆になり過ぎたし、そこで文章を締め直さうと

思つて、あの最後の五行にさしかゝつたのであるが、さうなると後少なくとも十枚位つゞけなければならぬ私の計畫だつたので、これはやつぱり改めて書き直さうと思つて、あの五行を少し粗い線ではあつたが、横線でも原稿紙一割に就いて二本強の割合で、抹殺したのであるが、それが讀まうと思へば讀める程度であつたので、ふと神經質な作者は斯ういふ場合は紙が破れる程インキや墨汁で塗り潰して、裏から澄かして見ても讀めないやうに消すものだがな、それも面倒臭い業である、よからう、と私は思つて、しかし少々不安だつたので、原稿紙の欄外へ 大きな字で、「トル」と書いておいたのである。ところがその後二月號の新文學が配達になつた時、由來私は妙な性質で、自分の書いたものは、よくよく氣の向いたものでない限り、發表してから一ヶ月や二ヶ月は讀まない癖を持つてゐるのだが、それが蟲が知らすといふものか、一寸活字になつたあの文章の終に目が觸れたのである。そして驚いたのである。あれ程明らかに抹殺しておいた五行の文章が、けろりとして活字になつてゐるたからである。

世に筆禍などいふ、私などの様な臆病者には空恐ろしい言葉があるが、私の右に擧げた諸場合は、決して決してさういふ恐ろしいといふやうなものではないが、これも確に筆禍見たいなものには違ひないのである。俗に二度あれば三度と言つて三度目には最も川心しなければならぬと言はれて居るが、私のは幸ひにして三度が三度とも、先づ小さい災難だつたと今では胸を撫で下ろしてゐる次第である。

殊に斯うは書いて見たものゝ、それぞれの場合になつて考へて見ると、屹度色々さうしなればならなかつた事情や、止むを得なかつた譯や、或ひはほんの一寸した間違ひからなどでさういふ事になつたものに違ひない、とは萬々察しられるのである。が、さう何も彼も察してしまつては世の中は少々退屈になり過ぎるから、右一寸書いたやうな次第であるが、考へて見れば、それもこれも身過ぎ世過ぎの爲であるか？ 殊に前記の雑誌新聞の記者諸氏は、悉く鬼でも蛇でもない、どころか、人間としては皆善良溫和な君子人であることは、私が喇叭をもつて讀者に吹聴することを辭しないものである。だが、記者となり

作者となつて双方に分れた時は、これは行司となり力士となり、東方となり西方となつたやうな譯で、時に編輯者賞めも受けるであらう代りに、反對に、私はいきほひこの一文の結論として、もう一口私に悪口を述べさせて貰はうならば、諸君、諸君はシエークスピアの「オセロ」といふ芝居の中で、たしか主人公オセロが戀人のデスデモナの心が變つたと人傳に聞いた時、憤慨の餘り地駄太を踏んで「Fathers, from hence trust not your daughter's mind!」(父等よ、自今は諸君の娘に氣をゆるし給ふな！)といふ言葉があるのを覚えてゐるか？ 今、私はそれに習つて、作家と讀者よ、自今編輯者に心を許し給ふな、と言ひたいのである。つまり税吏と女との外に、心を許すべからざる者として、大正聖代新たに雜誌新聞編輯者と云ふものが一つ増えた譯である。(しッ！ 誰ですか、作家もその中には是非加へなければならぬ、と言ふのは？)

閑話休題。

さて、先に言つたやうな譯で、前章の文章の最後の五行は削つて、この文章がつゞくも

のと、讀者諸君思つてくれ給へ。もう十年も前のことであらう。——三回に渡つて私が屢々十年前の話を色々に繰返すことに就いて、私は重々諸君の寛恕を乞ひたいのである。その頃、文壇では自然主義文學の人氣が次第々々に下火になり掛つて、と言つて白樺派は未だ頭角を現さなかつた頃のことである。そこで何者が當時の文壇に於いて人氣があつたかと言ふと、永井荷風一派の三田文學であつた。當時私の通つてゐた早稻田の學校と三田文學の學校とは平氏源氏の様な關係になつて、早稻田の機關雜誌の早稻田文學は、さしづめ源氏夷の類か？ だから當時、まるで田舎者が東京に出て來て立ん坊でもしてゐる程みじめに見えたものである。而も私達はその下に學生として學んでゐたのである。二十歳の私達はひどく煩悶した、現に私の友達で今井白楊といつて、自由詩社派の詩人で、當時詩人として既に多少文壇の一部に知られてゐた男があつたが、彼は色々と手續までして、早稻田學校から三田學校へ轉校する運びまでし出したものである。私たちの煩悶は一日一日と一方ならぬのである。現に早稻田文學の編輯主任の相馬御風は、雜誌の上で屢々敵の大

將永井荷風に讀辭を呈するのである。私の別の友人の、三田學校に通つてゐた何某といふ文科生がその頃私の下宿に來て話すには、君、君たちも思ひ切つて三田の方に轉校し給へな、二年にでも、三年にでも轉校出來ると思ふがな、三田はいゝよ、學校の教室なんか感じが悪いと思つたら、みんなで學校の傍のカフェーの二階に集まつて、そこへ先生を呼んで來るのだ、そして珈琲を啜りながら、ストーヴを圍んで講義を聞くのだ、學校のストーヴより同じストーヴでもカフェーの方が溫い氣がするからな、と嘘か本當かさういふのである。すると私は羨しさうに、いゝな、僕の學校には教室にさへストーヴがないんだよ、だから教師も生徒も教室の中で外套御免なんだよ、感じが悪いからね、僕はこの冬中學校に、出ないことにしてゐるんだ、と言ふと、相手は、君、授業料を拂つてゐる學校に出ないのは損ぢやないか、損だよ、それに君、早稻田の文士たちは雜誌なんかで三田の文士たちを此頃時々顔色を伺ふやうに賞めてゐるが、三田の方では相變らず百姓文士に何が分るもんかと言つて随分輕蔑してゐるよ、君も、あんな學校を出ると輕蔑されるよ、と言ふので

ある。輕蔑されるだらうな、と私は慨嘆これを久しうしたものである。

さうなると、稀に學校に出ても、如何に私が稀にしか學校に行かなかつたかといふ證據には、十月の或日久しぶりで、一寸學校を覗いて來ようと思つて、私は袴がなかつたのでそれを隠すために丈の長いトンビを着て、烏打帽を被つて、本を一冊も持たずに、ひよこくと町に出ると、町の家々に日の丸の旗が立つてゐて、小學生年頃の子供が如何にも休日らしく町を遊び廻つてゐて、變にお祭らしい氣がするので、私は道を歩きながらも、どういふ日だらう、何でも大演習が濟んだ時分だから、天皇が選幸でもされる日であらうなぞと思つて、うかうかと早稻田學校の門の前に來たのである。すると、こゝでも門がびつしやりと閉まつてゐて、日の丸の旗が又の字に組み合はしてあるので、おやおや、と思つて引返したことがある、歸つて宿の者に聞くと、何でもそれは神嘗祭とか新嘗祭とかいふ日であつた。それ程稀に私は學校に出て行つて、同級の學生たちの顔を見ると、如何さま早稻田田圃の名に適はしく、彼等は皆小作百姓然としてゐて、實際、「先生、藝術とはどう

いふ術を言ふのですか？」とか、少し進んだのでも、「ショーチョー主義といふのは消えて長しと書くのですか、それはどういふ意味ですか？」など、笑はないで質問するのである、そして外の學生たちも笑はずにその問答を傍聴してゐるのである。これは輕蔑されても遺憾ながら仕様がな、と私は悲感しながら歸つて來るのである。

さういふ次第で、だから私は學校には一ヶ月に一度はおろか三ヶ月に一度もあぶない、やつと半年に一度ぐらゐる行つた切りで、友達の齋藤寛や、今井白楊や、増田篤夫や、三上於菟吉やと明けても暮れても往來して、そして三田文學流の文學に浮身を窺してゐたものであつた。確か前章にその名を出したところの、三富朽葉は、私は彼とは生前五六度しか會はなかつたが、今言つた私の友達が皆彼を尊敬し、彼を先輩視して交際してゐたので、私も彼等を通して彼の言説を聞いて尊敬してゐた。その彼の言ふのには、荷風の當時發表した小説「隅田川」は實にいゝ作である。だが、自分もこれから二年勉強したら、屹度あの位のもは書いて見せる、といふ話を私は人傳へに聞いて、實は私自身あの作には餘り感

心しなかつたのだが、彼がさういふ位なら、さうかな、そんなものかな、やつぱり荷風はえらいもんだな、と思つたものである。實際私が當時私の友達を尊敬してゐたことは、今でもさうだが、言葉の外である。やはりその頃のことであつたが、雑誌「太陽」で百圓づゝの懸賞で一回毎に選者が變つて、十回ばかり小説や脚本の募集をしたことがあつて、それに就いても朽葉の話として、なアに、あんなものは選者に當て込んでしないで、少しばかり念を入れて書いたら、屹度當るよ、と言つたさうである。そして、果して、今井白楊が第何回目かに應じて當選した、當の朽葉も第何回目かに應じて當選したことがあつた、私は大いに驚き且つ感心したものである。

谷崎潤一郎が文壇に名乗りを擧げたのもその時分のことであつた。「少年」「幫間」「秘密」と次々に發表されて「悪魔」の出た時は、私は何でも早稻田學校の文科第二年生であつた。が、今も言つたやうに、私自身は學校に少しも出なかつたので知らなかつたが、人傳へに聞くと、片上伸先生はひどく潤一郎に感心して、私たちの級の者に「悪魔」に就いての感想

と言つたやうな課題を與へて、徵發したといふことである。無論私は書かなかつた。坊主憎ければ袈裟まで憎いと俗の譬の通り、私は早稻田學校が憎いにつけて、その先生の命ずることなど、何と若氣の至りだが、聞くもんか、従つて片上伸と小説「悪魔」と、ちやんちやら可笑しいや、などと友達と語り合つて、一笑に附したものである。随分私も不良な學生だつたに違ひないのである。

けれども、世間の風潮とか流行などいふものは、中々輕蔑出來ぬ力のあるもので、そんな、假りにも自分の籍を置いてゐる學校を無視して、遙かに遠い學校の流儀に憧れるなどいふ不心得は、私と私との周圍だけかと思ふと、引合に出して氣の毒だが、その後私は現今新進作家として、且つ健實な作風をもつて鳴つてゐるところの、細田民樹、細田源吉など、兩三度顔を合はした時、彼等にも同じ風が染みてゐたのを發見して驚かされたことである。彼等は早稻田流の粗野を嫌つて、三田風の都會式の優雅を慕つた餘りか、申し合はしたやうに優しい言葉使ひをして、殊更に歌舞伎芝居を覗き歩き、江戸情調を讚美し

てゐたものである。例へば友達同志呼び合ふのにも、何々君とは呼ばないで、何々さんと
言ひ、僕と言はずに、私と言つてゐたやうである。従つて正宗白鳥でも、相馬御風でも、
中村星湖でも、いやしくも早稻田流の作家は悉く輕蔑してゐたものである。

ところが或時のことである。例の私達の仲間の中の權威者三富朽葉の言葉として、諸君、
當今猫も杓子も三田文學三田文學と言ふが、つまり現今文壇に於いて、三田文學派でなけ
れば文學の正道でないやうに言ふが、どうもよく考へて見ると、僕はあの派の文學といふ
ものは、自然主義よりも何よりも現今の日本文壇の諸流派のうちで、最も古い流派である
やうな氣がする、諸君の考はどんなものだらうと言ふのである。成程、成程、と言つたま
ま、その時朽葉の周圍にゐた者は、悉く二三度考へるやうに首を横に振つて、結局、成程
考へて見るとさうだな、と贊成したことであつた。私もその一人だつたのである。

この朽葉の言葉は、これを例へば聖書の中の何かの文句のやうに、色々何人も人が
思案を盡して考へたならば、色々に取れるだらうが、一口に言ふと或點中々言ひ得たもの

と私には思はれるのである。

近頃文學批評壇に本流支流といふやうな、どうでもいい、問題が、大分喧しく持ち出され
てゐる。假りに今さういふ部類を分けて見たとしたところが、本流にだつて悪い、なつて
ない作家の、つまらない作もあるだらうし、支流の作家にだつて大きに捨て難い、十分價
値のある作があるに違ひないことは言ふ迄もないが、或時私の或友人が言ふには、それは
君、三田文學派はつまり支流なんだよ、そして何といつても自然主義が本流で、そして、
その流れが後に人道主義になつたんだよ、つまり現今でいふと人道派が本流で、さあ、當
年の三田文學派は今の何に當るだらうかな、さあ、さうだな、まあ、人間社一派だね、つ
まりあの人間社一派は支流だよ、と言ふのである。僕の考は違ふよ、とその時又別の友達
が言ふのに、君の所謂本流に屬するものでも支流に屬するものでも、どつち側だつてい、
作家は皆本流だよ、例へば人間社の中のい、作家は本流だし、人道派の出來損ひ作家は支
流だよ。それぢや君と、以前の友達が膝を乗り出して言ふには、三田文學にも持ち上げら

れその後人間社にも持ち上げられてゐる泉鏡花を何と見る。或ひは又、前派にも従属し後派にも追従して居る、小山内薫、久保田万太郎の徒を何と見る、彼等こそあの一派が支流であることを證明するものぢやないか？ あれは別だよ、ねえ、君、とその時その第二の友達は多少やり込められた形で、私に救を求めたものである。私、元より頭の悪い人間で、さうてきばきと判断をし兼ねるものであるから、さうだねえ、どういふのかねえ、とどちらとも答へなかつた。だが彼等の言ふ通り、文壇に於いて、無論どこでも同じだらうが、そして洋の東西を問はず、その波に大きい小さい、長い短いの違いはあらうが、一方に人生を真向に振りかざして、従つてその末派は眞面目をはき違へたり、センチメンタルになり、過ぎたり、退屈な作を本領としたり、等、等して世に迎へられ、疎んぜられたりする傍に他方には藝術を立看板にして、従つてその誤つたものは厭に氣どつたり洒れたり、不眞面目らしくなつたり、等々して世に迎へられ、疎んぜられる現象は、これ自然の法則である。だが、さういふ末派末流はいざ知らず、詮ずるところ藝術の爲に奉仕するところ、或ひは

又人生の爲に奉仕するところ、それは晝夜交替の職工か、東西に分れた力士か、早い話が人道派が固くなり過ぎず、藝術派が柔らかくなり過ぎなければ、行きつくところは一つであらう、と私は考へるものである。さうでない限り、すべて皆これ谷川か、田圃の水か、都會の溝か、途中で干上るか、段々と太くなるか、つまり大川に至らんとする支流であらう。

されば、支流で終るのも本流になるのも、元よりその人に拘ることである。或一派が如何に時あつて隆盛であらうとも、それはその人の藝術と何の関係もないことである。寧ろさういふ派のもとに集合することは、多くの腹に力のない作者等にとつては、悪い結果を生むことがあつても、良い結果を生じることには少ないか、と私は愚考するものである。

閑話休題。

（十一）

鍋井克之の小説——新しい人と古い人——昔の良妻と今の良妻——三十歳と二十歳——島田

清次郎——菊池寛——克之の小説と或人の話

四

鍋井克之の「古風な畫家とその妻」(新文學九月號所載)といふ小説を讀むと、——或る畫家が友達の畫家と、その細君との三人で簡單な避暑旅行に出かけるところである。この二人の畫家は共に年の頃三十四五歳で、現今の畫壇では新進作家の位置に屬するもので、従つてその作品の傾向も新しいと言はれてゐる方であるにも拘らず、その實生活の方面から見ると、舊時代に編入されねばならぬ性格の持主だといふのである、つまり古風な畫家云々と表題せられた所以であらう。さて、主人公の畫家の「私」といふ人物が思ふには、今の二十歳位の青年が女性に對する考を窺つて見るのに、彼等は悉く自分自身の心を思ふさま打開いて、相手の女性の要求する心持をも十分受入れて、即ち相手の心持を自分の心の中

に生かし、そして眞に同情してゐるところがあるやうに見える、つまりそれを夫婦の場合に當て簞めると、さういふ新時代の夫婦は例へば散歩をする時には公然と腕を組んで歩き、或ひは何方かへ外出して歸つて來ると、晝の日中でも抱き合つて接吻し合ふと言つたやうな體裁である、それに反して「私」やその友達やは一尙女性を尊重する氣持になれないどころか、今迄の日本人通り、現に自分たちの細君を處するのに、用のない時はなるべく押入の隅にでも隠しておきたい、と言つたふうな流儀だと言ふのである。

ところが、「私」の友達の、「私」同様古風な畫家の、今彼等と一緒に旅に出る細君といふのは彼女の夫とは年も十歳以上違ふだけあつて、決して似たもの夫婦の類ではなく、古風とは反對のもので、早い話が人中で大きな口を遠慮なく開けて笑ふし、化粧法だつて天成の眉毛を抹殺して、改めて歌劇女優流に一の字に引直すといふやうなやり方だし、無論子供などは女中に任し切りで、人目に着き過ぎる程の奇抜な扮装をして、どんな人中にでも洒々として出て行くし、それで藝術に對する理解などもあると言つた風な人物なのである。

古風な畫家である「私」は、實際彼自身舊時代に屬する人物でありながら、時としては又甚だ新しいことを考へもし肯定もするのである。言ふには、自分の幸福を主張しないやうな女はこれからの時代には適さない。妻たる者がその幸福を主張することは、やがてその夫の慰めになるべき筈である、だから昔の良妻と今の良妻とは自ら違つて來なければならぬ、或程度までの物質慾を増進させたり、生活力に刺戟を與へたりするのが、つまり現代の新しい女性といふものである。——けれども彼は現に彼の、友達の細君とは違つてずつと音無しい細君に對しても、決してそんな風にはさしてゐないらしいのである。そして「どうも自分たちは未だ三十代でありながら、もう古くなつたのかね」などと言ひながら、そこに何となく半分大人になりかゝつたおちつきのやうなものを感じて、餘り不愉快な氣もしないといふのである。

さて、小説に於いて、この三人の旅行中に一つの出來事が起るのである。といふのは、その新時代の細君が、彼等の旅先の避暑で偶然一緒となつた或る別の畫家と、舊時代の人

たちから見ると、十分疑ひを抱かせるやうな行動をしたのである。即ち彼女の古風な夫はそれを見て忽ち不安を抱く、彼の友達の「私」も大いに心配する、そこで彼等は相談して、僅か二三日のたゞけで、早々その地を引上げることにする。すると彼女は夫や友達の腹の中などには全然無關心な態度で、さう、私も一度歸つて、久しぶりで賑かなカフェーで珈琲でも飲みたいと思つてゐましたの、歸りませう、賛成々々、と言つた風で、何の邪氣もなく同意して歸ることになる、といふ筋である。その歸りの汽車の中で、主人公の「私」がその友達の畫家に「僕等は新しい人間と古い人間との中間にあるんだよ、だから新しい人の考が解つてゐるくせに、自分では新しくなれないのだよ、作品だけはまあ新しいといふことで通つてゐるのもその理屈なんだらうが、然しもう根本は君の作でも僕の作でも古風だからね。」——

ざつと、この小説はさういふ風な畫家とさういふ風な細君との、二日ばかりの避暑旅行中のことを仕組んだもので、前述の私の話からその作風を讀者が早呑込に推察すると困る

から断つておくが、この作者獨得の、素人のやうな味と、玄人のやうな巧さと、舌足らずのやうな物の言ひ方と、それで中々周到な用意とをもつて、誠に面白く綴られてある佳作である。私は愛讀したものである。が、實は私は今日はこの小説そのものを批評したり、或ひは未知の讀者に推稱したりしようと思つて持出したのではないので、だからそれは他の機會にゆづる事にして、こゝでは私自身のこの文章の前置用に借りて來た次第なのである。大方の諸君、諒せられよ。

ところで、元々これは小説の話だから、中に綴られてある事件は恐らく作者の作り事だらうが、その中で主人公なる畫家「私」といふ人物の意見は、樂屋話をするやうだが、大方作者その人の考と見て差支へないのである。といふのは、現に作者鍋井克之は私の中學以來の友達で、長年の間私たちは折に觸れて色々の意見を交換して來たものであるが、此頃私は彼と屢々この新派に就いて話し會つたことがあるのである。すると、この問題に就いては多くの場合、私の意見は彼の意見、彼の感ずるところは私の感ずるところ、悉く一致

するのである。今私がこの小説を読んで、その出來榮えに就いて論ずる前に、早速應用して自分の隨筆文章の前置にした所以である。恐らくこれは私と彼だけではなく、多くの私たちと同年輩の諸君に、これと同じ感想を抱いてゐる人を見出す事は難くないだらうと思ふ。もつとも前述の小説に書かれてゐるだけで見ると、そこで新しいとか古いとか言つてゐるのは、恐らく女性觀だけの違ひであつて、新しい人々もこゝで言ふ古い女性觀の持主があらうし、古い人々にも案外新しい女性觀の人もあらうとか、或ひは又二十歳でも古い人もあれば、三十歳でも四十歳でも新しい人もあるとか、さては抑もよい藝術の作品ならば、元より新しいとか古いとかいふ事はない筈である、立派な作品や偉大な人格は總て時代を超越したものであるから……等と言つてしまへば、まあそれ切りの話であるが、こゝで私の言はうとするのは、そんな風な難かしい理屈は暫く傍に置いてのことである。讀者諸君、幸に諒せられよ。

閑話休題。――

——近頃僕は四五人の二十歳の青年と會つたのである、二十歳と言へば、僕とは漸く十歳そこ／＼しか違はないのである。現今の文壇に於いて、どういふ小説家がいゝのですか？ とその中の一人の青年が或時僕に聞くので、思ひつくまゝに、里見弴などいゝんでせうな、と僕が答へると、えゝ、里見弴？ とその青年は目をまん丸く見開いて、全く心から呆れたといふ表情で、私達の中では里見弴は輕蔑的になつてゐるんですよ、輕蔑の代表者に……と言ふのである。(こゝに省略)

どうしてです？ と僕が聞くと、彼等が異口同音に答へて言ふには、私達は彼の小説を讀んでも何の興味も見出せません。彼の問題にしてゐることは私達には何の問題にも値しません、彼の小説から私達たちは何の感動をも、何の刺激をも受けることが出来ません、彼と私たちとは帝國と過激派ほどに他人です。……

永井荷風は？ 讀んだことがありません。久保田万太郎は？ 知りません。芥川龍之介は？ 玩具にも値しません。菊池寛は？ 大道演説の類だらうと私たちの仲間では言つて

るます。宇野浩二は？ 大阪落語でせう。では、正宗白鳥や徳田秋聲は？ 私たちの誰もまだ讀んだことがありません、讀みたいとは思ひません。ぢやあ、諸君は一體誰を愛讀してゐるのです？ と僕が聞くと、さあ、さあ、と彼等は動搖して、何とも答へないのである。

始め、僕は彼等の言ふことに少なからず呆れもし憤慨もしたものである。だが、僕自身二十歳の時、やはり彼等と同じやうに、當時の世に現れてゐた大小數多の作家を誰彼なしに、無茶苦茶に輕蔑したことを思出した。そこで、僕は彼等の言ふこと爲すことを、頭ごなしに笑つてしまはないで、参考して見ようと思ひ立つた。ところが、少しばかり考へ進めて、僕自身の二十歳の時代と、今の二十歳の彼等とを對稱して見ると、似てゐるところなど殆どないことを僕は發見したのである。

早い話が、二十歳の僕たちは汁粉屋と蕎麥屋と牛肉屋とで育つた。そして歌舞伎芝居と義太夫とに浮身を窺した、が、彼等を見ると、カフェーに出没して、活動寫眞と歌劇とに

熱中してゐる。僕たちは自然主義文學に育てられ、神經衰弱の詩歌に感動して來た、この世は住むに値しない、生活は苦痛である、文學はつゞめると悲しみと退屈との記述で、文學者は従つてさういふ生活をしなければならぬ、とまあ、さう言つた風に考へた。だから、僕たちの時代の二十歳の青年はみんな殊更に眉を擧めて、わざと狂的な目付をして、厭世と退屈とを多少無理耶理に意識しようとした爲に、いつか本物のさういふ氣質にさへ感染してしまつた。

同じやうに先輩を輕蔑するにしても、彼等の先輩といふものを無視して、殆ど眼中や計算に入れてゐないやうに見えるが、僕たちのは大いに計算に入れて、そして輕蔑しようと多少努力した形であつた。だから、彼等が先輩に對して少しも惡びれないで思つたことを遠慮なく言ふのに比べると、僕たちの時は時々反抗的に同じやうな態度をとつたにしても、そこに何となくぎぢぢない、不自然が附纏つてゐた。正に雲泥の相違である。

月に、花に、戀に、死に、二十歳の僕たちの感慨が胸の中から溢れて來た時、即ち僕た

ちは一人町をさ迷ひながら、或ひは部屋の机に肘を突きながら、何かなしに歌をうたふのが常である。その時僕たちは半太夫か、河東か、一中か、富本か、蘭八か、長唄か、或ひはそれ等のどれでなくても、それ等に似た、それ等を眞似た、出鱈目の唄をうたつて感懐をやつたものであるが、今の二十歳の青年はグルックが「オルフォイス」か、モツァルトが「ドン・ジョヴァンニ」か、ロツシニが「セギリアの理髮師」か、兎に角そんなものゝ歌詞の一節で思を晴らしてゐると見えるのである。銀座通の玩具屋の小僧が、或晩私はその店先を通りかゝつてゐると、「今日も一日濟みました、どしどし店を片付けて、早くねんねを致しませう」と出鱈目の言葉を、出鱈目の歌劇の曲めいた節でうたひながら、ハタキを掛けてゐるのを僕は見たことがある。小僧でも最早や新時代のもものは浪花節や義太夫節を、口にしないと見えるのである。

現に、僕の一人の二十歳の友人は、或時何かの話の折に、「新版歌祭文、お染久松野崎村」の芝居の話が出た時、お喋りの彼が急に黙つてしまつて、少しもその話の中に這入らない

ので、どうしたんだ？　といろ／＼聞いて見ると、何と、彼はお染久松といふものゝ存在を知らないのである。實際、嘘のやうな話であるが、知らないらしいのである。僕がそこで、藏の窓から娘が顔を出してゐる下に、美男の丁稚が下から見上げてゐる版書とか、義太夫とか、サワリとか、野崎村の三味線の連れ弾きとか、一寸でも彼の耳に這入つてゐるやうなことを、色々と例を挙げ説明すると、は、ア、と彼は幾らか合點が行つた形で、成る程、それなら聞いたことがあるやうだね、と言つた。これは實際の話なのである。そして更に驚くべきことには、この男は人一倍に音楽好きの方で、現に身分不相應にも、西洋音楽の蓄音機のレコードを數百枚も所持してゐるといふ事である。

彼れ此れと考へて見ると、例へば人間同志の心持が變な風に狂れ合つたり、病的なまでに神経質になつたり、埒もないことを空想したり、妙に變幻不可思議なことに興味を持つたり、さては滅び行くものに未練を残したり、異常な官能の穿鑿をしたり、等、等——悉く三十歳四十歳の僕たちが苦み、喜び、悲むところに、彼等が何の苦みも、喜びも、悲み

も、従つて何の興味も見出さないのは無理からぬことである。世の中は住むに値しないと、かこの世は苦界であるとか、人の心は計り知られぬとか、灰色だとか、退屈だとか、さういふ事は彼等の問題にしないところ、こだはるに値しないところ、否感じないところ、それを色盲に譬へると、殆ど目に附かない色の部分にしか當らないらしいのである。

だから、彼等は大體に於いて詩といふものを認めない。といふと語弊があるが、もし彼等が詩を読んだり、作つたりするならば、それは正にワルト・ホイットマンの流儀のものに違ひないのである。そんなら、現今の小説を認めない彼等は、どんな小説を作つたり、読んだりするのだろうか？　——これは一寸手近に例を思ひ出さないが、多分レニン政府が最も歓迎するやうな文學でもあらうか。

僕はふと島田清次郎のことを思ひ出すのである。彼の著はすところ、「地上」第一部といふものを読んだ時、僕は中々上手な面白い小説だと思つた。その第二部第三部は、僕は讀む機會を得ないが、何でも僕の友達で讀んだ人の話を聞くと、第一部よりはずつとその小

説的價値が落ちるさうである。僕は彼の二三の雑誌に發表した短篇小説を讀んだことがあるが、僕自身の標準からすると、それ等は悉く随分お粗末な、幼稚な、拙劣な作品であつたと記憶する。僕の多くの同年輩の友達はその話が出ると、彼の話など滅多に出ないが、頭から輕蔑してゐる、嘲笑する材料にしてゐる。僕もまあ、彼の言論は言ふ迄もなく、それ等の短篇小説を讀んだ記憶からして、「ふん、どうもね……」と言つた風な言葉を浴びせるのが常である。

ところが、今試みに二十歳の青年に清次郎に就いての意見を聞いて見ると、多少趣きを異にするのを僕は見出すのである。彼等の或者は、さうですね、あまり感心しませんがね……と言ふ、私は一寸好きですがね、と言ふ者もある。中々いいところがあると思ひます、と他の者は言ふ。小説は下手かも知れませんが、所謂いゝ小説とは何ですか？……別々の者は叫ぶ。要するに、二十歳の青年諸君が現今の諸小説家を無視するやうに、僕たち三十歳四十歳の人々は島田清次郎を無視してゐる、が、二十歳の諸青年は、僕たちが同時代

の諸小説家を認めてゐる程度で、島田清次郎を認めてゐるやうに見えるのである。

僕の友人の、或る成功した新聞經營家が常々自慢さうに言ふ言葉に、現代に於いて成功を博するには、言ふ迄もなく常に現代に先んじて事をしなければならぬ、だが、それには無暗に先んじてはいけぬ。例へば一步先んじてしまふと、言はゞ現代人の理解の外になるから、たとへ先覺者の名譽を得ることがあつても多數者から成功の報酬を得ることは出来ない。そこで、その所が難かしいので、つまり時代と共に、常に時代より半歩進んでゐる必要があるのである、と彼は言ふのである。ぢやあ、一步進む能力のある者が、半歩だけ餘裕を残してやつて見たらどうだらう、と僕が混ぜつ返すやうに言ふと、友人は笑つて答へなかつた、考へて見ると、それではやつぱり眞劍味がなくて、いけないことに違ひない。今假りにこれを千古の名言として、實際これは假りの譬へ話で、島田清次郎を時代に一步先んじてゐるものとすれば、さし當り半歩先んじて現代に成功してゐる文學者を求めると、即ち菊池寛であらうか。

こんな事を言ふと、現今の多くの文學者は怒るかも知れないが、僕思ふのに、成る程諸君は頭の中だけでは時代に半歩も一歩も先んじてゐるかも知れない。否、或ひはさういふものに理解があるかも知れない、だが、それは要するに理解だけの話で、實際に於いては諸君は變に物事に氣が引けたり、直に背中がむづ／＼するとか、腋の下から冷汗が出るとか言つたり、主義や理想を持つ事に後目たさを感じるのか、そんなものが持ち切れない程複雑なのか、要するに餘りに物事に敏感であり過ぎる爲か、つまり頭だけが先んじてゐるのかも知れないが、實際に於いては後れてゐる所以である。つまり諸君は鍋井克之の「古風な畫家とその妻」といふ小説の中に出て来る、二人の畫家の類であるのである。ついでながら、そこで強ひて同じ小説の中の他の役割を、前二者に當て箴めて見ると、あの中の細君が島田清次郎で、第二人目の畫家が菊池寛といふ所であらうか、これはすつかり話が協道に這入つたが、……

——君、今にがらりと、つまり古典主義から浪漫主義へ、浪漫主義から自然主義へといふ風に何とかした拍子に、一寸した動機から新時代が舊時代に入れ交ることになるのではないか、と僕は思ふよ。すると、幾多の非難や議論は起るとしても、つまり島田清次郎などがその時代の先觸れといふやうな名儀を後世の史家から貰うやうな事になるのぢやないか、——といふやうな事が考へられないだらうか？ 君、恐ろしいよ、恐ろしいよ、うっかりしてゐられないよ。——

と、以上は私の或三十歳の友達が或日私に話した話の梗概なのである。つまり前に掲げた鍋井克之の小説と同じく、これも私のこの隨筆文章の前置に借りて來たもので、こゝで何故私がこの話の話し手の名前を書かないかと言ふと、前の小説などと違つて、元談話のことであるから、随分杜撰な取次になつたらうと思ふからである。それにいつの間にか多少私の意見も這入つたらうか、と心配したからである。

なる程、そんなものかなア、とその時私はその話を聞いて、感慨これを久しくしたものである。若しそれが本當だとすると、私たちが十年かかつて研究し、浮身を饜して來た自

然主義も象徴主義も、悉く今は何の足しにもならぬかと見えるのである。(私がどんなにさういふ文學に浮身を窺したかに就いては本年一、二、三月の「新文學」紙上、「閑話休題」即ち前三章参照)又、言はれて見ると、彼等の考へるところ、言ふところは、私たちにも全く合點が行かないことではないのである、全く、鍋井克之がその小説の中で言つたのと同感する所以である。と言つて、そんなら一つ改めて、今日から二十歳の青年と共に、今迄の考をさらりと西の海に捨て、しまふと言ふ譯にも、斯く生れ斯く人となり斯く勉強して來た私などには今更何とも出來ないことである。だが、私もこれから一つ氣を附けて、二十歳の青年と共にデモクラシイの研究等、して見ようと思立つてはゐるのである。――

閑話休題。

五

歌劇女優河合澄子——早稻田劇場の舞臺——六年前の女——田端の永瀬義郎の家——廢願派の家——女優志願の女——新時代の先觸

或日、私の隣人で友人である、畫家の永瀬義郎がやつて來ての話に、「君、君は歌劇女優の河合澄子といふのを知つてゐるか?」知らない。名前は聞いたことがあるやうだね。」「中々、君、歌劇女優としては相當な位置にゐるのだよ。」「それがどうしたんだ?」「それが面白んだ」と永瀬義郎は大變面白さうにつゞけるのである。「その河合澄子といふ女を僕は知つてゐるんだよ、そして君もよく知つてゐる筈なんだよ。君、一度見に行つて見給へ、今早稻田劇場に出てゐるんだ。見たら、君も一ぺんに思ひ出すよ。」

それから、永瀬義郎は私が催促するまゝに、その河合澄子に就いての話をしたのであるが、便宜上その話を後廻しにして、さて、その翌々日あたりに、私は同じく私の友人の鍋

井克之と、早稻田劇場に出かけたのである。後で分ることであるが、克之も亦、義郎や私と一緒に河合澄子を知つてゐる縁故があるのである。

私たちが早稻田劇場に這入つて行つた時、丁度開幕中の舞臺では、一種異様な光景が展開されてゐた。諸君も知らるゝ如く、早稻田劇場は普通の日本式の芝居小屋で、而も餘り大きな劇場ではない。私たちがその見物席の一隅に歩いて行きながら、舞臺の方を見ると、私たちの立つてゐる場と舞臺の面とが同じ高さであるのと、私たちの所と舞臺との距離が近いのが、如何にも場末の芝居小屋らしい感じを起させるのである。

さて、舞臺は普通の新派芝居などによくある、日本室の座敷の場で、而もさういふ安物劇場のことであるから誠に貧弱な道具立てで、それ〴〵の位置に障子、唐紙、入口などがあつて、莫産を敷いた板の間の片隅には、小道具として、近所の下宿屋からでも借りて來たと見える机がたつた一つ置いてある切りなのである。が、言ふ迄もなく、それ等は別に決して驚くべき事ではないのであるが、私たちが這入つて行つた時、その場面の中に、黒紋

付に髭を生やした男、女中、四五人の女學生、髭を生やした大島緋の着物を着た男、書生らしい男、都合八九人の人物が舞臺に横列に手を引き合つて、何でも此世の中は面白く歌つて暮すに限ります、と言ふやうな日本歌劇流の歌を合唱しながら、六七歩前に歩き出しては舞臺の最先端まで來ると、今度は先に前に進んだゞけをやはり正面を向いたまゝ、後を下つて行く、そこで背景に接するので再び六七歩前に歩き出す、——とさういふ小學生のやうな運動を繰り返してゐるのである。

「可笑しいね」變なものだね」と私たちは感嘆の聲を洩らしながら、所定の場所に案内されたのであるが、私たちの心の中は中々そんな有合はせの感嘆詞で、その十分の一も表現することの出來ない異様な感動に打たれた。それは無論、一口に言ふと、撲られるやうな可笑しさや、正視出來ないやうな恥かしさや、だから彼等の憶面のなさに對する驚きや、阿房らしさや、新規さに對する珍しさや、——つまりそんなものである。何でも新家庭とか言ふ藝題で、少し見てゐるうちに、その新しい、ハイカラな細君が留守の間に、主人

や、主人の友達や、女弟子たち（といふのは、そのハイカラ細君はヴィオリンの教授をしてゐるらしいのである）や、女中などが、鬼のゐない間の洗濯をしてゐるらしいといふ事が分つた。何でも夫たちは藝者遊びをしたり、都々逸を唄つたりするやうな種類の人間で細君たち（主人公及びその友人の）は、所謂目白女學校流のハイカラ者流と對稱してある仕組らしかつた。

即ち、舞臺で數人の連中が横列に手を引合つて、歌ひながら幼稚園の生徒のやうに、前に歩いたり後に退いたりしてゐる最中に、突然一方の障子が開いて、髪を七分三分に分けて、金縁の眼鏡に、肩から金鎖を下けて、裾模様の着物を着た、盛裝の細君が歸つて來る。と、一同驚いて、散々に恐縮するといふことになるのだが、そのハイカラの細君が當の河合澄子なのであつた。

「ね、君、確にあの女だらう？」と私の友達が私に耳打した。

「うむ。僕も覺えてゐる、」と私は答へた。

實は始めて永瀬義郎が私に報告して來た時、彼は克之と一緒にこの劇場に來て、河合澄子を見たのであつた。その時の狂言では、何でも澄子は水夫の洋服を着て、歌をうたひながら斜めに飛んでゐるたさうである。その度に見物は「河合！」とか、「澄ちゃん！」とか、「日本一！」とか囃すのださうである。義郎と克之とは驚いた。この鳴らしてゐる女優が六年前の果してあの女だらうか？ 間違ひぢやないかな？ しかし、確に似てゐるな、などと二人は囁き合つた。が、その芝居からの歸りに、二人が程近いカフェー・パウリスタに這入つて珈琲を飲んでゐると、そこへ一團の賑かな連中が這入つて來た、そして、その先頭に先の河合澄子が、代表的な歌劇女優の恰好をして進んで來たのである。

やつぱりあの女だ！ とそれを見て確めた瞬間、彼女の方でも義郎と克之とを認めたと見えて、一寸驚いた顔をしたが、忽ちにツと微笑を浮べて、目禮したのである。すると、此方の二人は見苦しい程あわて、しまつて、立上りかけて、半分中腰のまゝで、稍々叮嚀にお辭儀を返した、が、その時は當の澄子は同行の連（多分歌劇役者たちなのだらう）と共

に、もう別の賑かな話をしながら、三つ四つ離れた向ふの卓子に坐つてゐたのださうである。

確にこの女は、六年前に、田端の永瀬義郎の家の客間の、ほろ／＼の椅子に、屢々私たちと向ひ合つて腰かけた女に違ひないのである。その義郎の家に克之も私も屢々遊びに行つたものである。私たちは三人とも、當時最早や二十五六歳の青年でありながら、自分で自分を養ふだけの能力を持つてゐなかつた。まだしも三人の中では義郎が一番裕福であつたといふのは、彼は自分の腕では家賃を取つて来るだけで、米も味噌も油醬も炭も悉く茨木縣の郷家から仕送りを受けてゐた。次には克之で、或る一身上のごたく／＼があつた後のことで、澁谷の親類に同居してゐて、その食費だけを國の家から直接にその親類に送られてゐた、だから、彼は小遣錢を自分の手で何處かゝら取つてくればよいのだつた。中で私が一番みぢめで、私の外に母親を一人かゝへて、私には味噌も米も、或ひは食費も送つてくれる如何なる親類もなかつたのであつた。そして他所から金を儲ける術に就いては、そ

れ等の私達同様、少しも知らなかつた。だから、私は當時質屋と借金とで生活してゐたのであつた。

「永瀬君」と私は屢々言つた。「僕は家にゐられないんだ。母と顔を見合はしてゐることが堪らないんだ。世の中に戀の苦勞、病の苦勞、貧の苦勞と、苦勞にも色々あるが、貧の苦勞は色で言ふと何色だらうね？」

「さあ、何色かね？」

「ところで、そんな譯だから、」と私は言ふのである。「君には迷惑だらうが、さて僕は家にちつとしてゐられないと言つて、何處へ行くところもない、電車賃も持たぬ、毎日君のところへ来るから坐らしといてくれないか。無論、君は用があつたら出てくれないし、仕事があつたらしてくれてもいい。」

「かまはないよ、」と義郎は言つた。

その永瀬義郎の家の隣に末松勇といふ畫家が住んでゐた。彼は年齢は義郎や克之より三

四歳下であるだけに、氣持などもずつと若かつた。前者が最早や多少この世の鹽を嘗めて音無しくなつてゐたのに引きかへ、彼は毎日唱歌と雑談とで暮してゐた。恐らく彼も私たちと同じ程度の貧乏に違ひなかつた。家賃も追ひ出される最後の一つ手前まで滞らし、電燈は點すことを差止められ、如何なる御用聞きにも顔を反向けられてゐた。それにも拘らず、彼は毎日三人以上の友達を集めて、唱歌と雑談と笑聲とで暮してゐた。思ふに彼等は本朝の文學壇を一昔前に訪れた悪魔主義、象徴主義、唯美主義、或ひは廢頽主義、天才主義等の門派に違ひなかつた。

「勇敢だね、彼等は」と私たちはその隣の義郎の二階から、彼等の唱歌や笑聲を聞きながら言つた。が、實を言ふと、私たちも象徴主義、唯美主義等、等の門派に違ひなかつた。現に私たちが坐つてゐるその義郎の二階の客間の壁には、その主人の畫くところの、異様な裸體畫の額が並列してゐたし、私等の向ひ合つたり、腰かけたりしてゐた卓子や椅子はその主人が古道具屋を漁つたり、古木で組立て、更紗やドンゴロスの布切で裝飾した。

阿片窟の中の道具立のやうなものばかりであつた。

そこに、毎日用もないのに出かけて行く私の外に、克之も屢々やつて來たのである。如何な智者であり、才物である彼も、當年は未だ風雲を得ないで、やはり無聊に苦んでゐたに違ひないのである。風雲と言へば、實は彼等は風雲に乗り損なつて、當時甚だ足か腰かを痛めてゐた際だつたのである。といふのは、その二三年前に義郎が主宰者になつて、當時流行の新劇團を組織したことがあつた。義郎はその爲の金の奔走や、役者たちを慰めたり勵ましたりすることや、そして結局失敗して間もなく、又細君に病氣になられたり、死なれたりしたのである。克之は又克之で、その義郎の劇團に素人役者の一員として出場したり、會計係を引受けて苦勞したり、更にその劇團附の或女優と戀愛の苦勞をしたり、つまり私が先に彼は或る一身上のごたくがあつた後云々と書いたのはその事で、ひどく衰弱してゐたのである。そして私は、唯貧乏の一點張りで、溜息を吐いてゐた折柄であつた。だから、私たちは若い廢人のやうに、顔を合はして、いつもほそくと老人のやうに元氣

なく話してゐたのである。そして、

「彼等は愉快さうだね」と時々隣の家から起る笑ひ聲に、羨ましさうに、又猜ましさうに聞耳を立て、は、舌鼓打つて言ひ合つたのであつた。その中には時々女の聲なども交つて聞えることがあるのだつた。

さて、途中で話の腰を折つて済まぬが、もう大分の枚數を書いたし、殊にこの話の詳しいことは、随分前から一篇の小説に仕組まうと思つてゐることなので、所々省略して、少し急ぎ足で後を話すと、——そんな譯で、私たちよりもずつと餘裕のあつた末松勇の方では、私たちが何とかして、少し金でも取る道を見出して、多少生活の安定を得たいなどと考へてゐる間に、彼等は毎日手分けして町に藝術と女とを探しに行くか、でなければ家で藝術と女との話に花を咲かしてゐたのである。が、或日、勇は隣の義郎の家に駆け込んで来て、

「永瀬君、永瀬君」と彼は長髪をふり亂しながら、聲を上ずらして叫ぶには、「僕は今日一人の天才を見付けたよ。それが君、而も素的な美人なんだ。それが、君、その女が明日からずつと僕の家へ来るといふんだ。君、來たら是非見てくれ給へ。それや素的な美人なんだから、そして天才なんだから。天才を見出した喜を、君も一緒に喜んでくれ給へ。」斯う言つて、彼は義郎が「何の天才なんだ？」と問ひ返す前に、玄關からそのまゝ往來に飛び出して、自分の家とは反對の方角に走つて行つてしまつた。

その話を私や克之が義郎から聞いた時、私たちは鼻の上に皺を寄せて、「ふん、相變らずだね。ところで、君はその女を見たのかい？」と義郎に聞くと、

「見たよ、」と義郎は癖で、悠然として、「體の小さい女だが、縹緞は中々可愛らしいよ、」と言つた。

「天才つて、一體何の天才なんだ？」と私が聞くと、

「それが、何の天才だが、末松にも分らないんださうだ。が、確にあの女は何かの天才だと末松は言ふんだ。その天才を見出すのが自分たちの義務だと言つて、力んでゐたよ。」

そして又數日経つたのである。その間に私も一二度義郎と一緒に末松勇を訪問して、その女に會つたことがある。名前を確か「みいちゃん」とか呼ばれてゐた。成る程、小柄だが可愛い顔をした、十七八歳の少女であつた。そして彼女は主人の勇のみならず、彼のところへ集まつて来る友達からも悉く持てはやされてゐた。

その間にどういふ事を私が見たか又どういふ場合に義郎が遭遇したか、まだその外勇の家はどういふ事件が起つたか、どういふことを私が耳にしたか、それを書いたら私はこれから三十枚以上の紙を費さなければならぬ。のみならず、今こゝでそれを書いてしまふと、肝腎の小説を書く時に感激を失つてしまつては尙困る。それに最早やこの雑誌の締切期日を十日も過ぎた今日、そんなに悠々と落着いてゐられないから、省くとして、その後だんくその女、「みいちゃん」が義郎の家へ遊びに来るやうになつたのである。勇の所謂みいちゃんの天才といふのは、音楽か芝居かにあるらしいといふ事になつた。だんく親くなると共に、彼女は義郎に煩悶を洩らして言ふには、自分は女優になりたい、が、あんな毎日歌ばかりうたつて、のらくら書生ばかり集まつて、氣狂のやうな話をしてゐる中に

るては、どうにも仕様がな、と悲しむのである。

ところが、先に言つたやうに、當時義郎は芝居で失敗して間もなくの頃であつた。克之も亦女優で苦んだ傷跡の未だ全く直り切らない時であつた。私も亦、彼等の失敗の事件を傍觀して來たものであつた。だから、私たちは彼女の言ふことを聞くと、恰も天保年間生れの老人のやうな口調で、女優なんて言ふもの、生活が悪い生活であること、芝居などといふものは、誰にとつても一種の誘惑に違ひないが、決して若い女の近寄るべき道でないこと、あゝいふ中に這入つて成功する者は、普通の目で見て、即ち千人の女の中の一人の片輪者が當選するのであつて、決して尋常の道でないといふやうな話を、くどくどと説明し、訓誡したものである。すると、「みいちゃん」は決して新しい女のやうに口答へしないで、「さうですか、はいく」と言つて聞いた恰好をしてゐた。そして「まあ、お茶でもお上りなさい。又花でも引きませうか」といふやうな事になつて、私たちは「みいちゃん」と

共に、無論賭ける金などを持合はさなかつたので、賭なしに花かるたを弄んだりしたものである。先にも言つたやうに、私は毎日義郎の家に出かけて行つた。そしてなるべく遅く迄そこで時間を潰す必要があつたので、いつでも夜が更けるまで遊んでゐた。彼女もそれに附合つて一緒にゐた、そして一緒に花を引いた。

「女優なんか、そんなものになるなんて、飛んでもない考ですよ。女は尋常に嫁入りして尋常に子供を生むのが一番いいのです。……さあ、青札二枚這入りました。後牡丹が一丁切りですよ。」

が、それが一週間か十日程の後には、彼女はもう夕方になつても義郎の家へ姿を見せなくなつた。聞くと、誰とかの紹介で、山田耕作のところへ每晚音楽を習ひに行つてゐるとの話だつた。義郎は時々夜遅く、彼女が動坂の方から歸つて来るのに會ふことがあると言つてゐた。そして、その後、今度は私に苦勞な事件が起つて、母親と別れたり、借りてゐた家を夜逃げしたりするやうなことで、義郎の家にも無沙汰をし、従つて「みいちゃん」の

ことなど頓と忘却してしまつたのである。そして六年が経つたのである。義郎にも、克之にも、そして私にも色々な事があつて、今、私は義郎と一軒おいた隣り同志に住んでゐるのであるが、その六年前の「みいちゃん」が、即ち、こんな風に話して來たら、讀者諸君も十分察しられたであらう、即ち河合澄子なのである。――

私と鍋井克之とが早稻田劇場の見物席の一隅に坐つて、以上の事を追想しながら、呆氣にとられて見てゐると、先の唱歌者達は悉く退場してしまつて、さて河合澄子の一人舞臺となつたのである。澄子のハイカラ細君は例の舞臺の一隅の机の前に金ピカの日本装で、如何にも主役らしい落着きを以て悠然と坐るのである。そして彼女がブカ／＼と葉巻煙草をくゆらしながら、歌劇一等俳優の沈着さで、傍若無人に見物の方に時々流し目をくれてゐると、やがて取次の案内で入り替り立ち替り、ヴァイオリンを習ひたいといふ様々の種類の客が現れて、そこで色々と白の受け渡しがあるのだが、その間ふざけた事を言つて見物を笑はしたり、おどけた態度を見せて見物を喝采させたり、彼女は悉く十年役者をした程

に馴れ切つてゐるのである。

「ゑらいもんだね、」と感心癖の克之は言ふのである。「顔なんかもちつとも昔と變らないね。」

「それから思ふと、僕たちは、殊に僕などはこんなに頭が禿けてしまふし、君だつていつの間にか年寄り顔になつたね、」と私が言ふと、

「全くだね、」と克之。「よく永瀬の所であの女に鹿爪らしい顔をして、役者になることの不心得を訓誡したものだ、汗顔の至りだね。君はその時、女だてらに役者になつて成功するものなんて、千人に一人の片輪者が當選するんだと言つたが、あの女もその種類かね。」

「さうかも知れない。しかし、あの女には何處か一生懸命なところがあつたんだね。が、こんな者になるとは思はなかつたよ。」

「やつぱり何處か新しいんだね、」とそこで克之は平生の持論を出して、「僕たちはもういつの間にか古くなつたんだよ。あの女はあれでやつぱり新時代なんだよ。」

「さうかね。何にしてもヴァイオリンなどもいつの間にか稽古したんだね。これが新時代かね。」

「新時代だよ。あの僕たちが這入つて來た時、大勢で横に手を引いて、唱歌をうたひながら前や後に歩いてゐた光景など、つまりあれが新時代なんだよ。」

「あれが新時代かね。成る程さうらしいところもあるね。だけど、あれが新時代の先觸れだとすると、新時代も餘りたのもしくないね。僕等の子供の時分に改良劍舞とか言ふものが流行つたね、一寸あれに感じが似てるぢやないか？」

「似てる、似てる！ 併しやつぱりあれより此方が十年なり二十年なり新しいよ。」

「つまり僕たちの時代はあれが先觸れだつたのかね？ 道理で、やつぱりたのもしくなかつたよ。」

「しッーしッー」とその時、私たちがつい餘り聲高になつて話しつゞけたので、見物席の彼方此方から叱正の聲が起つたのである。そこで、私たちは恐縮して沈黙してしまつた。

すると、後には劇中の河合澄子の奏するヴァイオリンの音楽だけが静まり返つた満場に傳はるのである。――

(十、十一)

八四

六

あの頃のこと——福士幸次郎——彼と今井白楊に就いて——さ迷へる幸次郎——彼の詩と論
文——増田篤夫の福士幸次郎論

或日、町で福士幸次郎に會つたら、にこ／＼して笑ひかけながら、いきなり「あの時分のことを書いてゐますね、愛讀してゐますよ、つゞけてお書きなさいね、」と彼は言つた。私は一瞬間何のことだか氣が附かなかつた位だつたが、直にそれは私がこの一月二月の「新文學」に書いた、文藝閑話休題といふ文章(註、本文第一、二章)に就いてであることが分つた。「ええ、書くつもりですよ、又そのうち……」と私は答へた。

思ふに、恐らく彼がさう言つたのは、何も私のあの文章そのもの、主意とか面白さとかに同感したり、感心したりしたものであるに違ひない、つまり私のその文章の中の「あの時分」の事が彼のやはり「あの時分」の事と可成り接近してゐるので、彼も亦「あの時分」

の回想の懐しさに打たれたのに違ひない、その、私の文章は、彼を喜ばせる、直接でなく間接の役目を勤めたものであらう。

先にも屢々言つたやうに、あの時分の私たちは象徴派文學の學生であつた。それは今日慶應義塾の學生が無茶苦茶に福澤諭吉を大師匠と仰ぐやうに、私たちは譯わからずにステファン・マラルメを、彼の背中からまるで後光でも射してゐるかのやうに、尊敬したものであつた。何故私がそんなに屢々象徴派に就いて、又その時分のことに就いて話すかといふと、私としてはその頃が懐しくて堪らぬからである。その頃私たちは月評家といふものを持たなかつた、彼等の目に止まるやうな私たちは身分でなかつたからである。その頃私たちは皆獨り身で、大抵生活するだけの費用を親から當てがはれて、他を顧慮する何ものをも持たなかつた。催促しに來る雜誌記者も持たなかつた。原稿料が高い安いと心配することもなかつた。又何の心ならずも文を作る必要がなかつた、何の宴會にも招待されなかつた。そして象徴主義はさういふ境遇の時に、私たちが専心して研究した文學であ

つた。その文學が邪道であるか、その文學が時代遅れであるか、その文學が偏屈であるか、さういふ問題は外にして、回顧して私とその文學を一番文學らしい、一番純粹で、一番意氣で、一番愛すべきものに思ふのも無理からぬことなのである。だから、私は此頃一日に一度以上、その文學の本を取り上げて、たとへその一頁でも讀んで樂み、且つ「あの頃」の事を回想して喜ぶのは……、私も既に老人の第一歩に這入つたものであるか。

その頃わが福士幸次郎は、私たちの知人友人の仲間の中で、三富朽葉、今井白楊等と共に、多少文學壇、殊に詩壇に於いて、既に名前を知られてゐた。二ヶ月に一度位は詩作の發表もしてゐた。だが、私が今言はうとするのは彼の詩の批評ではない。

始めて私が福士幸次郎に會つたのは、何處でだか今は覚えてゐない。が、彼に會ふ前から、私の友人たちを通じて彼の噂を聞いてゐた、その噂は私に彼を十分尊敬させるに足るものであつた。友人達の噂では福士は天才(天才的といふ程の意味)だといふことであつた。そして同じやうに友人間に天才と言はれてゐた故の今井白楊と彼は無二の親友だと

云ふ話であつた、その今井白楊の家で私は多分始めて彼に會つたのではなかつたかと思ふ。何でもひどく變つた人だといふ噂であつた。こんな話をするのはいけないかも知れないが、當時「早稻田文學」に出た秋田雨雀の「少年とピストル」といふ小説の主人公のモデルは、福士幸次郎であるとの評判も聞いた。私は到頭その小説を読む機會を持ち得なかつたが、何でもその主人公はやつぱり大變天才的な少年として現はされてゐるさうである。言ふ迄もなく、彼は眞面目で、そして藝術的才分を多分に恵まれてゐるといふ定評であつた。二十歳の私にとつて、まだ見ぬ幸次郎がひどく變つてゐるといふことも、「少年とピストル」の主人公であるといふことも、天才であるといふことも、眞面目な人であるといふことも、悉く私をして彼を尊敬させる條件と見えたものである。

さて、今井白楊はその時分から一日に一升以上の酒を缺かさず飲んでゐた。飲むと彼は比ひ稀なる雄辯を以て藝術を談じた。彼は私よりも二歳の兄であつた。彼は私をその酒の爲に赤くなつた、然し秀麗な目を輝かして睥みつけながら「象徴とは八百屋の店にある林

檜を性慾的だといふやうなことぢやないよ、」と叫んだ。「さうかな、八百屋の店頭にある赤い林檎が性慾を思はせるといふことは、そして赤い林檎が性慾を象徴するといふことにはならぬのかなア、」と私は考へさせられた。當時私が人傳てに聞いたところに依ると、近々白楊はベエトオベンを劇曲に書くといふ評判であつた。それが而も福士幸次郎との合作になるのだとのことであつた。言ふのは大體は幸次郎の發案で、白楊がそれを案配して綴るといふのらしかつた。實際、今考へて見ても、白楊といふ人は文章家で、藝術的才分も十分に持つてゐる人に違ひなかつた。まして當時地方から上京して間もなくの私が、彼と幸次郎との合作になる劇曲「ベエトオベン」が作られるといふ噂は、到底雁次郎が新富座に来るとか、里見弴が始めて劇曲を發表するとかいふことよりも、否それ等とは比較にならぬ程の雷電的な出來事に相違なかつた。

到頭その劇曲は成らなかつたらしかつたが、確かその時分であつた。そしてそれが多分私が福士幸次郎を始めて見た時ではなかつたかと思ふが、その白楊の部屋で、何でも一つ

の部屋に七人程の人々が集まつて盛んな藝術談が始まつてゐた。私もその中の一人だつたが、元より私は一言も口をきかずに、人々の話に耳を傾けてゐた。すると、その坐の中から立つて行つたのか、それとも始めからその坐の中になかつたのか、見ると、部屋の片側の長谷川大將の庭に面した窓敷居に頭を抱えて、一人の髪が長い、青白い顔の、如何にも詩人らしい青年が何か苦悶して居るか、思索してゐるかの恰好をして居た。それが福士幸次郎なのであつた。その時の福士幸次郎に就いては私はそれ以上覺えて居ない。

ところが、或晩のことである、當時私は目白の女子大學の裏の方に増田篤夫と一緒に下宿してゐた。夜十二時頃、私は篤夫と一緒に何處かへ出かけて、歸り路を天主教會の前さしかゝつた。殆んど一人通らない暗い夜更のことであつた。その時突然物蔭から黙つて大きな男が私たちの方のこゝくと近寄つて來た。私たちは思はずぎよつとした、それがやつぱり幸次郎だつたのである。私は幸次郎の顔を、その時も私一人の記憶では朧ろ氣ながらしか覺えてゐなかつたが、長い交際をしてゐる篤夫が直に見付けて、「びつくりした、

福士君か、相變らずだね。」と言つた。多分それから、そんなに遅かつたにも拘らず、彼は私たちの下宿に來て、話し明かしたのか、それとも三時か四時頃に歸つて行つたものか、その外のことは私は覺えてゐない。後で聞くと、誰か外の人の話に、「福士の訪問時間は少し調子外れで困るよ、夜の二時頃に、晝の二時頃と同じ顔をしてやつて來るんだからね、そして又彼のは屹度さういふ時間に限るんだから。變な男だね。」と言つて居た。さういふ事さへ、私には何となく、何と言ふのか文學的に何とも意氣な事のやうに考へられたものである。

「物事を冥想すること、それから目醒まされた心の幻像が跳梁すること、それが即ち詩である」と、私たちの偶像、ステファン・マラルメの教にある。幸次郎は恐らく深夜の巷をさ迷ひながら、冥想と、呼び醒まされた心中の幻像の跳梁とに悩まされてゐたのであらう、「遅日巷の塵に行き、力ある句に苦みぬ、」といふ薄田泣菫の句も思はれる。彼は詩に悩んでゐたのであらう。そしてそれは私たち凡庸の徒には見舞はれないところの、羨望すべき

悩みに違ひない、と私は思つたことである。

その次に彼に會つたのはずつと後のことで、水野葉舟の家であつた。葉舟の家から私は彼と一緒に歸途に着いた時、四五丁の間並んで歩いた。「君はトルストイの『戦争と平和』を讀みましたか？」と彼が私に言つた。「えい、私はその代譯をしたので、その部分だけ讀みました。」と私。「いい作ですね！」と彼は身震ひするやうな感動した聲で言つた。「私もまだみんな讀んだ譯ぢやありませんが、あの中に、何といひましたか、何といひましたか、」とそこで彼は道を歩きながら、突然頭を抱えて、それは彼がいつか長谷川大將の庭の見える、白楊の部屋の窓のところでした居たと同じ恰好を私に思ひ出させた、そして暫く考へて居たが、「今名前を一寸忘れましたが、二人の女が話をして居るところがありますね。その話はちつともそんな話ぢやないんですが、それを讀んで居ると、何とも言へぬ性慾的な氣分が感じられますね、いや、二人の女の會話にはそんな言葉はちつともないので、それにも拘らず……。いや、豪いもんですね、豪い作ですね。」と言つた。そして道玄坂を

下りたところで私は彼と別れたのである。

(斯ういふ話をすればまだあるが、今に又「新潮」から福士幸次郎の印象でも取りに來た時の用意に割愛しよう。)

それから私はずつと三四年彼と會ふ機會を持たなかつたのである。——福士幸次郎は今もう幾歳になるか？ たしか私より二三歳の年長であつた。彼にも今はもう妻もあり子もあると聞いてゐる。が、私が十年前の凡人の生活から、依然として凡人の生活をつゞけてゐるやうに、人傳てに依ると、彼は今も尙先に言つたやうな意味で、少しも素行がおさまらないとのことである。思ふに、彼は十年一日の如く、謂はゞ「力ある句に苦み」ながら、蒼をさ迷ひ歩いてゐるのであらう、死ぬまで彼が詩人であることに變りはないに違ひない。この二三年來、彼は屢々主に詩について、侃々諤々の論を發表する、私は言ふ迄もなく手元の雑誌にそれが出てゐる時は、決して看過しないで讀んで居るものである。これは私だけの觀察ではあるが、惜しいことにこの天才肌の詩人は、頭が少し良くないのではないか

と思はせる程、その文章にも、その話し振りに意味の通らない節かじが間々あるやうに見受けられる。私は二三の人に彼の文章に就いて聞いて見たが、「どうも分らない文章ですね」とみんな云ふやうである。嘘か本當か知らないが、彼の「有島武郎論」に就いて、やはりその分らない箇所を或時武郎が彼に會つた折質問すると、彼は頭を搔いて、「それは屹度私が最初に見た、あの長谷川大將の庭に而した窓にもたれて、頭を抱えてゐた恰好と同じだつたに違ひない。」いや、僕にもはつきり分らないんです。」と言つたさうである。

が、それにも拘らず、讀者よ、忍耐してあの「武郎論」を讀んで見給へ、どこか一寸普通の評論家に見られない面白さがある。そして鋭さもあり、正確さもある。さういへば、彼のこれ迄屢々讀者を困らしてゐるリズム論などにも、それが見出される。多分彼の頭は、それぐの機械は平凡なものではないのかも知れない、が、それと共にやつぱり完全なものでないことも確である。つまり一口に言ふと、餘り頭がよくない人だと私が考へる所以である。

だが、私は最近上梓された詩集「展望」といふものを見て、少なからず感心させられたものである。こゝにも無論先に言つたやうな彼の缺點が見られないではないが、しかし、詩に於いてはそれ等の缺點を飛び越えて、十年前私の友人たちが彼に名づけた「天才的」と言ひ得るところの、何かそんなものを私たちは感じることが出来るのである。詩人の癖として彼も亦少し大袈裟に叫びたがり、大袈裟に悲しみたがる。が、さういふ缺點の裏にも一路純真な、賞讀すべき何ものかを私たちは感ぜずにはゐられない。(面倒くさい人は、本屋の店頭に立つて、巻頭の「展望」といふ詩を一つだけ讀んで見てもそれは分ると思ふ。)だが、それに就いては、去年の秋「新潮」に發表された増田篤夫の「福士幸次郎論」といふ名文がある。私がこれから色々と廻りくどい言葉でいふよりも、それを讀まれんことをおすゝめしておきたい。

ところで、最近四月號かの「新潮」に彼が寄せた「詩壇よりの警告」といふ一文を私は讀んで、少なからず讀成したことを、こゝでは言ひたいのである。そこには彼の以前の論文に

見られるやうな難解な箇所は先づ殆どないと言つてもよい、そして彼の非難せんとするところ、彼の言はんと欲するところを十分讀者は首肯することが出来る。

近頃、一般文壇の人が詩壇に對して冷淡であり、それを無視する傾きさへあるといふことが屢々詩人諸氏から憤慨されてゐる。それにはいゝ詩人がゐないとか、いゝ詩がなかつたとか、と一口に言つてしまふと、詩人諸氏から又ひどく叱られるかも知れないが、事實はさうなので、そしてその理由は福士幸次郎の説に依ると、この十年間の詩壇は暗中摸索とそして試練の時代だつたからと言ふのである。それは彼の説に依ると、リズムの問題だつたと言つてゐる、私は悉く讀成して讀んだものである。そして彼は今我國の詩壇はそれを解決すべき機運にのぞんでゐる、船は出來た、これから荷をたゞ能ふだけ満載して、大洋に出ればよいのだと叫んでゐる。だが、彼の如く、この十年の間、詩壇の百人の詩人が悩んでゐたかどうかは私にとつて疑問である。多くの人々は、或人々は鼻唄のやうに、又別の人々は詩の本然を忘れて別の方に力瘤を入れてゐたやうに、私には見えるのである。

さればこれは福士幸次郎が、自分一人の出來事を一般的意味のものに考へる、増田篤夫の言葉を借りると、彼の「癖の一つ」かも知れない。が、何にしても彼自身はこの十年の間、十年と言へば我々人間にとつて決して短い年月ではない、傷ついた獸のやうに、暗中摸索と、試練との苦しい奮闘をつゞけたものに違ひないことを私は信じて疑はないのである。彼は町を歩き、貧乏に苦しみ、詩を作り、本を讀み、(本を讀むと言へば、彼は現今の文壇の人たちの中でも屹度指折りの勉強家に違ひない、或ひは普通の人が一日で讀んでしまふ數頁を彼には三日も掛る様な事もあるに違ひないが)そしてそこに多少掛値があるかも知れないが、彼の所謂船は出來、「これからはたゞ能ふだけ荷を満載して、大洋に出るばかり」の機運に達したのであらう、目出度いことの限りである。

前にも斷つた通り、私のこの隨筆はほんの雜誌の頁ふさぎの文章に過ぎないもので、元より何の議論をしようといふ考ではない、たゞ私はこゝで前書きとして福士幸次郎に就いて二三の思ひ出を綴つて、主意としては彼の今言つた論文を大方の讀書子が讀まれんこと

をすゝめたい爲に筆を取つたのである。人は興味と好意とをもつて見ようとすれば、如何なることでも知られ得ないものはない。今の一般文學壇の人々が詩歌に愛を持たないことは彼等の見解を狭くしてゐるばかりでなく、従つて彼等の不幸であるといふことが言へよう。その點で福士幸次郎の右の論文は諸君を益するばかりでなく、もつとも彼の癖として少し大がかりに慷慨的に絶叫する様の癖があるが、その中で彼が現今の小説壇に對する非難の言葉を數十行に亘つて述べて居る、それは無論同じ小説壇の一員であるところの、私も當然與へられて居るものである、そしてそれは元より全體の眞理でなくとも全體の眞理なんてどこにもあり得ないことで、私たちはそれを參考するだけの雅量と研究心を持ちたいと思ふ、その點でも一顧の値があると思ふのである。

それから今一つの目的は、私が先に擧げた増田篤夫の「福士幸次郎論」を色々な意味で私は諸君に推薦したいと思ふものである。私は何の掛値もなく、それはいい論文であると言ふことが出来る、それは福士幸次郎論であると共に、「展望」の批評である。が、それより

も更に諸君を益することは「詩とは何であるか」といふことを諸君に教へるものである。試みに「展望」一冊と篤夫の「幸次郎論」とを机の上に並べて讀むならば、諸君は今日から一つ諸君の知識(詩を愛する心)をひろめることが出来るに違ひない。

篤夫は「性急な内容主義者」を嗤ふ人だけあつて、一見多少氣取り過ぎて居るかと思はれる文章で、しかしそれはもう氣取りが氣取りでなくなつて、最早や所謂「コク」のある文章になつて居て、そして鋭い、明哲な頭腦に依つて、福士幸次郎とその詩集「展望」と、そしてその至るところに「詩とは何であるか」を述べて居る。私の見るところでは、彼は以前に書いた「有島武郎論」といひ、(同じ人の「有島生馬論」を私はとらない、)當今の雜駁な批評家と到底同日に言ふべからざる人であると私は見てゐる。その「幸次郎論」など(私の聞いた所、廣津和郎がそれを賞めて居た外、)どの人の口にも筆にも上らなかつたことを私は殘念に思つて、こゝに併せて大方の諸君にすゝめる所以である。私、元よりそれに感心した者である、殊に私は屢々成る程、斯ういふ風な事を言ふのに、斯ういふ言葉があるものかと

感心させられた、幸次郎の詩集「展望」も優れた詩集であるが、それは篤夫の論に依つてよい紹介者を得たものであると私は思つたことである。

——此頃私は偏頭痛と、齒痛と、雷恐怖病とでひどく苦んでゐる、何一つ手に付かず、何一つ考へることが出来ない。加ふるに神経衰弱が附け込んで、ひどく低脳の状態にある。この一文も相變らずいつものやうなものには違ひないが、更に頭の悪いもので、誰よりも引合ひに出した諸氏に禮を失したこと、濟まなく思ふ。

で、要するに、福士幸次郎の「詩壇よりの警告」と、「展望」と、増田篤夫の「福士幸次郎論」とをまだ讀まない人は、一度讀んで御覽なさいと言ひたいのである。それが主意である。

昨夜偶然上野の停車場で私は福士幸次郎に會つた。彼は例の通りにこくして私の方に進んで来て、何か祕密事をでも話すやうに、「私、この頃随分勉強して居ますよ、」と言つた。私たちは直に別れた、多分彼は例の恰好で頭を抱えて、色々の本に讀み耽つて居るからう。増田篤夫はどうしてゐるか？

(十五)

七

私の少年時代——文學といふ仕事——佐藤春夫の「殉情詩集」——陰氣過ぎる文學——ラフオ
ンテンと七五調——詩歌は文學の古里

菊池寛の「文壇春秋」の後をうけて、同じやうな感想めいた文章をこの雑誌に書く約束をしたのは、彼れ此れ三四月前のことであつた。そして愈よ約束の第一回を先月號に書く筈のところを、到頭締切に遅れて違約してしまつた。その時のつもりでは、佐藤春夫の「殉情詩集」に就いて、それから小説家協會に就いて、文士の講演に就いて、ざつとそれだけの題目に就いての感想を述べるつもりであつた。當時「殉情詩集」が出て間もなくのことで私も讀後の感想の新たな時であつた、又小説家協會は創立を宣言して創立の會を開いて間もなくのことで、何かそれに就いて私の意見を述べて見たかつた、同じく文士の講演といへば、七月から八月にかけて、私は久米久雄、里見弴、加能作次郎等と九州地方を旅行し

て、私自身は出なかつたが、諸氏の講演を親しく見聞して来たばかりの折で、それに就いても多少感想するところがあつたのである。

それが先に言つたやうに、先月のこの雑誌の締切期日迄に書けなかつたので、それから一ヶ月経つうちに、それ等を書かうとする感興が少しづつ薄らいで来てその代りに又新しい題目が出来て来たのである。その一端を洩らすと、「人間」八月號所載、新作家片岡鐵兵作小説「舌」に對する世評に就いて、それから有樂座で見た瀬戸日出夫作「夜の鳥」に就いて、「人間」九月號所載、福士幸次郎の論文「文學馬鹿話」に就いて、「時事新報」所載、葛西善藏の創作月評に就いて、等、等。

だが、私の性質の輕薄なせるか、それ等の諸問題も、それ等に就いて多少感想した日から一二週間の時日が過ぎてしまふと恰も俄か雨が通り過ぎた後のやうに、幾分沸騰してゐた氣も抜けてしまつて、今、九月二十三日、秋季皇靈祭、私の頭はこの天氣の如くほんやりと曇つて、もやくとして、不活潑で如何にも筆を取る氣がしないのである。斯うなる

と、何も今日に限つたことではないが、私はつくづくと文學を職業とせねばならぬ身の不仕合はせを嘆じるものである。

私は幼少の頃から文學が所謂三度の飯よりも好きで、抑も巖谷小波になりたいと思ひ、次に押川春浪になりたいと願ひ、さて十八歳の頃からは断然小説家になりたいと志望したものである。その時私には第一志望第二志望といふやうなものではなかつた。私には唯一の志望がある切りで、その外にはいくら考へ直しても、何とも融通が付かなかつた。ところが私が驚いたことには、私の中學の友達の百人の中には、一人として私と同じ志望を抱いてゐる者がなかつた、そして彼等の多くは第一第二第三と色々考へてゐる志望の中で、その時その折の先方の都合に依つて、どれか一つを選ばうと言ふ程の料見しか持つてゐないやうに見えた。だが更に一層私が驚いたことには、私自身學校に行く間はどうにか興資を出してくれる親類があつたといふだけで、男親はなし財産はなし、その上養つて行かねばならぬ女親を持つてゐる自分の境遇を參省すると、とても私の唯一の志望などに熱中し

てゐられない身分であつたにも拘らず、どうしても他の九十九人の友達のやうな考へ方にはなれないことであつた。

實際、世の中に文學に肩を入れようとする人間の情熱ほど不思議なものはない。年少の讀者よ。諸君はそれを諸君自身の經驗に依つて十分知つてゐるだらう。辛うじてそれを他のものに譬へると、それは恰も戀に似てゐる。二十歳の私も、何と親類の者に叱られても、何と友達に意見されても、私は、私は、文學の外に身を任すものはないと思ひ詰めたものである。それは戀する者の樂しさと、熱心と、苦しさとに似てゐる。恐らく諸々の文學の諸家も、一度は斯ういふ、同じ思ひを經驗されたことに違ひない。そして多分、彼がどうやら斯うやら一人前の文學者になつた喜びや、それから彼が文學者として世に生きて行く喜びや苦みや、さては彼が年老いて衰へた文學者になつた悲しみや寂しさや、悉く戀の一生に似てゐると見えるのである。所詮文學は或者にとつては、例へば私のやうな力の弱い者にとつては惡魔の領地内にあるものかと嘆息せらるゝことが屢々ある。

實際、この世の中で文學を——私の場合では、例へば小説を書くことを職業とする者、或ひは職業として小説を書く者ほど呪はれた者はないと見える。それが文學以外の職業なら、例へば豆腐屋なら朝早くから起きて、無茶苦茶に豆をひけばよい、辻の車屋なら出来るだけ客を物色して、さて一生懸命に走ればよい、だが、小説を書くといふ事には、そんな無鐵砲な努力は出来るものでもないし、又さういふことは慎まなければならぬ、早い話がこれは風流の仕事である。(この言葉を、年少の讀者よ、誤解すること勿れ。)ところが、それが職業となつて見ると、一方では雑誌編輯者が締切だと言つて攻め立てる、他方では月末の諸勘定取が靴を下けてやつて来る、勢ひ豆腐屋や辻の車屋のやうに無茶苦茶の努力をしなければならぬ。そこで彼等は乏しい感激をもつて、批評家の眉を擧めさすやうな小説も書くのである。先の譬を敷衍して文學を戀に見立てると、戀を職業とするものは藝者役者の類であらうか。しかし、何も心掛一つである。お互に職業文學者たるもの用心しなればならぬ。——さて、一體私は何を言はうとしたのか知らず。

左様、私は菊池寛の後をうけて、「文壇春秋」のやうな文章をかくことを、依頼され且つ引受けたのであつた。が、先に言つたやうに、書かうと意氣込んでゐた感想は、日が経つて薄らいでしまつたし、新らしい潑刺とした感想は生憎浮かんで来ないし、この經驗に依つてこの次からはその時に感想が浮かぶまゝに手帳の端にでも書きつけておいて、それを纏めて諸君にお目にかけることを約しておくこととして、今は仕様がなから先に上げた、私が一度書かうと思つた感想を、箇條書のやうな文章にして、此度の責をふさぐこととしようか。

一、佐藤春夫の「殉情詩集」は非常に愛讀した。元來私は春夫の詩歌を随分古くから愛讀してゐたもので、これは或時顔を赤くしながら作者にも白狀したことであるが、今から五年前だか、六七年前だか、一度私は彼の詩歌を論じようと思つて、乃木大將をうたつた詩だとか、天皇のお召列車を動かした機關手をうたつた詩だとか、それ等の載つてゐる雜誌（多分「昂」か？）から切抜いて取つておいたことがある。その後私は愈よ貧乏して、一

冊の古雜誌さへ金に代へなければならず、それには中の頁の切抜くと賣値段が下るので、御叮嚀に中版の洋野紙に寫し取つた事さへある、それは大分後のことで、多分雜誌は「我等」だつたかと思ふ、齋藤茂吉を賞めた歌は「昂」だつたか、九州の旅の一夜妻をうたつた歌は「我等」だつたか。此頃、私は作者に聞くとそれ等の原稿をすつかり失くしたと言ふので、此間から私のその取つてある筈のを探してゐるのだが、未だに見當らぬのである。

それ程愛讀した作者の詩集である、今私が少年のやうにそれを愛讀したのも無理からぬ事である。まして、嘗ては批評しようと思つて、切り抜いて取つて置いた作者の新作である、この機會に早速感想文を綴らうと思つた所以である。それを今數多の題目と一緒に、斯ういふ箇條書の下に述べることは、作者に對する思惑よりも、私自身甚だ意を得ないのであるが、その罪は私の取つておいた切抜が出て來た時か、他日もう少し落着いた時に償ふことにして、こゝでは唯私が非常に愛讀して、以來ずつと所謂座右に置いて、心の甚だ屈托した時、氣分の頻りにふさぐ時、雨の日、風の日、その頁を開いてゐること程、左

様に愛讀してゐると述べておかう。

私は現在自分が文學に従事してゐながら、まるでそんな事を忘れてしまつたやうに、恰も文學などとは全然縁の遠い、商業とか、工業とかいふものに携つてゐる人が、その職業の爲に心持が謂はゞ散文的になつた餘り、風流の文學を渴仰する様に、頻りに文學を渴仰する念に驅られることが屢々ある。さういふ時、私は日本の文學と言はず西洋のものと言はず、今のものと言はず昔のものと言はず、少年のやうな素直な心持で、手當り次第の文學の本を讀むのが常である。(時には自分自身の書いたものさへ、人のものと同じやうなつもりで讀むことさへある。)

私も此頃の多くの文學讀書家のやうに、好んでチエホフの小説を讀む。そして、今言つた様な時彼のすぐれた小説を讀むと殆ど隨喜の涙を流して、やつぱりこの世の中で文學が一番よいものだとか心から感嘆するものである。此頃私は秋庭俊彦譯のチエホフの「三年間」といふものを讀んだ。ついでながら、秋庭俊彦の翻譯は實に手に入つたい翻譯であると

いつも私は感心してゐる。さて、「三年間」であるが、私はそこに收められてある三篇の小説を悉く感心して讀んだ。が、その時の私の氣分の加減か、私はふと「これは餘り陰氣過ぎる」と思つたのである。外ならぬチエホフの、而もすぐれた小説であるから、申し分なく藝術的で、私等のやうなものが、何と非の打ちどころがないどころか、實にいい小説であるとか心から感心されながら、同時に讀み終つた讀者の心は、その小説の中の人物と一緒に、餘りに心が灰色になつてしまふのである。この小説は無論これだけでよいが、模倣性の強い日本人が悉く斯ういふ小説に感心して、日本中が斯ういふ小説に埋まつてしまつたら、至る所に自殺者が出来るに違ひない。これは冗談に過ぎないが、その時私は、私の或友人が、常々或文學に接した後、あの文學は僕には餘り陰氣過ぎる、と口癖のやうに言つたのを思ひ出した。この友人はもう五六年ももつとも前からさう言つてゐた。だから、概して僕は露西亞文學は嫌ひです、と彼が言ふのを、私はしやれの様に聞き流してゐたが、どういふ風の吹き廻しだつたか、私は其時、なる程餘り陰氣過ぎる文學といふものもあるなと

思つたのである。

恐らくチエホフの時代の露西亞は彼の小説にそつくりそのまま現はされてゐるのに違ひない。そして人々は彼に依つて、自分たちの時代、自分たちの境遇を見せられて呆れたことに違ひない。誰かの言ふ通り、今の世はいけない、我慢がならない、何を改めよ、此を破壊せよと叫ばれるよりは、斯ういふ小説を幾つも見せられる方が、世の中に革命を持つて來るに違ひない。これは前者が耳に訴へる代りに、心に訴へるからであらう。そして又誰かも言つたやうに、今の日本の状態はチエホフの頃の露西亞の状態に似てゐるかも知れない、だから、外のどんな文學よりも、斯ういふ文學が必要だといふのは道理である。その道理にどうして私が反對するものであらう？

だが、これは私の或時の考なのである。そして、斯ういふ事を言ふのは所謂眞理と面接する事を恐れるところの、心の弱い凡人の寢言に屬するかも知れないが、さういふ時、私はチエホフも、ストリンデルヒも、或ひはもつと私たちの生活に近い正宗白鳥や志賀直

哉やを傍に置いて、私は、私は白狀するが（これは譬へ話であるが、）百人一首を繙くのである、又此頃では、（これは本當の話であるが）「殉情詩集」を取上げるのである。佐藤春夫よ、怒る勿れ。

突然なことを言ひ出すやうだが、私は六七年前に、背中に鐘の畫の附いた叢書の中にある、ラフォンテンの英譯本を読んだことがあつた。それは諸君も知らるゝ如く、如何にも佛蘭西式な、垢抜けのした狐や狼が活躍する、イソップ流の譬へ話を、韻文で綴つたものである。だが、私には餘り面白くなかつた。

だが、同じ佛蘭西國の、誰だつたか或有名な詩人の詩に、自分は少年の頃ラフォンテンを母親の膝の上で好んで愛讀した、さて中學校に行くやうになり、大學を出るやうになり、世間で働くやうになり、女で苦むやうになり、喜び、悲み、恨み、怒り、そして何人かの子の父となり、今頭に霜を置く老年となつた、そして燈火の下で老眼鏡を通して、自分は樂み樂み讀んでゐる、それはラフォンテンである、と言ふのがあるさうである。

その後、又ある佛蘭西語の研究家から、ラフォンテンですか、無論そんなに難かしいといふやうなものぢやありませんよ、その癖、ラフォンテンが本當に分つたら、佛蘭西語も堂に這入つたものだと言ふ話ですがね、と私は聞いたことがあつた。

考へて見ると、しかし、これは何の不思議な話でもないのである。恐らく、何處の國にもこのラフォンテンのやうな文學があることに違ひない。佛蘭西人ならば、ナポレオンでも、ロベスピエールでも、或ひはボウドレエルでも、ロオランでも、一樣にラフォンテンを好み、ラフォンテンを愛讀するに違ひないのである。多分、他國人のストリンドベルヒとか、トルストイとか、どんな一流の文學者を呼んで來ても、ラフォンテンを讀むことに於いては一人の佛蘭西の馭者に如かないに違ひない。

就いて、私は日本の三十一文字とか、十七字とかの詩歌を考へるのである。話の運びをよくする爲に、少しこぢ附けたことを言ふやうだが、先に例に擧げた百人一首といふものを持つて來ると、これは歌そのものより、歌留多遊びに重寶がられてゐる位だから、とて

もラフォンテンとは比べものにならないかも知れないが、恐らく私たちの年齢以前の各々の日本人は「天智天皇、秋の田の」といふ響を子守唄と一緒に覺えたに違ひない。そして私たちが中學校に行き、大學に行き、及第し、落第し、軍人になり、相場師になり、或ひは社會主義者になり、教育家になり、泥坊になり、誠に人の一生は重荷を負うて道を行くが如きものか、やがて諸々の人は頭に白髪を見舞はれる。正月が來ると、今や彼等の孫たちが、「天智天皇、秋の田の」と讀んでゐる、すると年取つた社會主義者も、年取つた泥坊も年取つた軍人も、老眼鏡を鼻の先に掛けながら、「どれく、お爺さんが讀んでやらう、」と言ふことになるのである。——と、然し、これは冗談めいた話になつてしまつたが——

そこで私が常々思ふことには、詩歌は文學の古里であり、私たちの心の古里である。或者は志を立て、古里を出で、或者は古里に止まる、或者は古里に歸つて死に、或者は古里の外に死ぬ。或者は都に出て商人になり、或者は革命に身を投じ、或者は軍人になつて戦に出る、が、或日又或夜、誰か古里の思ひに心を叩かれぬ者があらうか。そして、今漢洋

のことは暫く問はず、我朝に於いては、詩歌の古里は五七、七五の調である、そしてこゝでも又或者は古里を去り、或者は古里の調を捨て、或者は古里の調を守る。傳統の力といふものは大きなもので、私たち日本人の心の中には、生れながらに、多少に拘らず、各々五七、七五の調に共鳴する琴線を持つてゐる。だから年少の讀者よ、箱根山を越えて來ると、突然目の下に廣々と伊豆の海が展開した、その海の沖の小さな島に波の打ち寄せるのがはつきりと見えた、と言はれたら、さ程驚きもしないが、それを「箱根山越え去り來れば伊豆の海や沖の小島に浪の寄る見ゆ」と歌はれると、忽ち私たち日本人の心の中に仕込まれてある琴線が鳴るのである、これはトルストイやドストイエスキイの預かり知らぬところである。

私だとしても、現代の詩壇の諸家が、如何に骨をけづり肉をそぐの思をして、新しい世に生れた人が新しい調を作らうとして（年少の讀者よ、この言葉を誤解する勿れ）口語の詩體を工夫したり、何の調もない所謂翻譯詩流の新體詩を作つたり、何と辯解しても唯散文

を適宜の短さに切つて、西洋流の詩の形に並べたやうな詩を作つたり、だがさういふ苦心の十年二十年の後にそこに新しい調の出來かゝつてゐることや、出來てゐることを毛頭認めない者ではない。現に私は先に言つたやうに、私の心が少年のやうに文學に渴仰する念に驅られる時など、貪るやうに私はさういふ詩をも悉く愛讀するものであるが、今のところ、私はそれ等には多少の研究心が働く爲か、やつぱりそれ等の詩に疲れる時、私は無意識に百人一首の歌を口吟んだり、七五、五七の調に近い詩歌の本を開くのである（これはしかし譬へ話であるが、）すると、そこに私は搖籃の唄を聞く思ひがするのである。

さういふ時、人は皆誰だつて詩歌の思ひに驅られる。だが、才のない人達は幾ら焦つても自ら詩歌を作ることが出來ない。さういふ時、人の作つた詩歌を、我ものやうに朗々誦するのである、すると、人はこの世の苦樂から、一寸ばかり超越する思がする。（然し、これも譬へ話で、いつ迄も詩歌がそんな境地にあるものか、又そんな詩歌ばかりが詩歌ではないのである、が。）

紀の國の五月なかばは

椎の木のくらき下かけ

うす濁るながれのほとり

野うばらの花のひとむれ

人知れず白くさくなり、

と私も誦するのである。――

斯う書いて來るうちに、最早や二十三日は昨日と過ぎて、今、二十四日午前十一時、新潮記者がこれを書いてゐる私の隣の部屋で待つてゐるのである。書かうと思ふ數々の感想をざつと箇條書のやうに述べようと約束しながら、その最初の項目の前置のやうなものでこんな長いものになつてしまつて、最早や締切期日のぎりぐり結着の時間が到着してしまつたのである。斷る迄もなく、これは最も頭の悪い時に、思ひ浮ぶまゝを走り書きしたやうな體裁になつてしまつたが、と言つて決して出鱈目を言つたのではないのだから、元を

言へば私自身の怠慢の罪からではあるが、讀み返し、削り、付け足す暇もなく、斯ういふ文章を活字にすることは、讀者の爲にでなく、私自身に對して重々濟まなく思ふ次第である。

(十・九)

隨
筆
雜
篇

労働祭の日

今日は五月一日である。私は一ヶ月餘り前から相州の海岸に来て一人で宿屋住居をしてゐる。空は薄曇りしてゐるが、風のない大變靜かな日である。

朝飯の時に給仕に來た女中が「又あのお廻りさんが來ましてね、聞いてましたよ」と言ふ。

「さうか」と私、「怪しからん奴だね。今日はどんな事を聞いてゐた？」

「いえ、やつぱりいつもと同じ事ですよ。どんな紙に書いてゐるとか、どんな筆で書いてゐるとか、書いてゐない時は何をしてゐるとか、お前たちにやつぱり冗談など言ふかとか、……。ねえ、そんな事を聞いてどうするんでせうねえ？」と女中。

「阿呆だね」と私。

——それは斯ういふ譯なのである。私がこの宿屋に來た四五日程後のこと、或日突然東

京から私の友達、江口渙がやつて来て、「どうしても書けない。思ひ切つてやつて来たよ、」と彼は言つた。

「さうか、この家は割合に静かだから書けるよ、」と私は言つた。その日から彼も私と同じ宿屋の滞在客の一人となつたのである。その夕方、二人で夕飯を食ふ時、「これ、おついでに……」と言つて女中が江口に宿帳を渡した時、

「警察で俺の名前を見ると、」彼が相談するやうに私の顔を見ながら言つた、「この家へ色んな事を聞きに来やがるかも知れないから、この家で變に思はないうちに、俺の方から先に注意してやつとく方がいゝか知ら？」

が、實はそんなに親しい友達であつて見ると、私として見れば、江口渙よりは正體の知れない警察の方がよつほどえらい氣がするので、その渙を、えらい方の警察がそんなに大騒ぎして調べたり何かすることはあり得ない氣がした。それに、東京なぞと違つて、こんな田舎警察など、恐らく箇人の名前などは、大臣か百萬長者の名くらゐり知らないだら

うから、この私の友達の心配は恐らく取越し苦勞に過ぎないだらう、と斯う私は思つたので、「そんな必要はないよ、君、」と止めておいたのである。

ところが、それがさうでなかつたのであつた。果して、女中がそつと報告するところに依ると、その翌日から毎日程巡査が私たちの宿屋の内玄関にやつて来て、「江口渙と云ふ人はどんな人か、恐さうな顔をしてゐるか、いつも何か考へてゐる様子か、どんな事を書いてゐるか分らぬか？」それが段々激しくなつて來ると、「飯のお菜は何が好きか、過激なものをお好む様子は見えないか、便所には一日何度位通ふか、夜寢てから寢言を言ふやうなことはないか？」等。

で、女中が「いえ、實に眞面目な、冗談口一つきかない方ですよ、」といふと、

「それやさうだらう、女のことなど言はないだらう、それが却つていけないんだ！」と巡査は江口渙に就いて詳しく聞きたいのか、乃至はその應待に出た女中と一分でも長く話したいなどといふ、中々隅に置けない人物で、もあるのか、それを誰かに形容させると、宇

野浩二の小説の如くだら／＼綿々として盡きないのださうである。が、そこ迄はまだ一應合點が行くとして、件の巡査は渙が来て以來、今迄一顧もされなかつた私のことをも、「はあ、散歩に減多に出ないか。成る程、晝でも夜でも始終寢床に這入つてゐるか、ふむ時々池の鮒を釣つてゐるか、さうか。何、蟲類を恐がる？ 浪の音を恐がる？ 風の音を氣にする？ 随分臆病者と見えるな、」といふやうな話をして行くのである。

そして、江口渙が東京に歸つてしまつて、私一人になつてからも、否、却つて私一人になると尙念を入れて、××巡査は毎日程宿の内立關に現れては、大體以上のやうな愚問を女中に浴びせかけるらしいのである。もし私のところへ誰か尋ねて来るなり、或ひは東京から来て泊つてゝも行くなりすると、流石職掌柄でいつの間にかそれを聞き知つて、一つ話柄が増えたのを喜ぶやうに、一層長く内立關に腰を下ろして宿の女中を悩ますのださうである。――

「又お廻りさんが來ましてね……」と今朝も女中が言ふのは、右のやうな次第からである。

今日は五月一日、言ふ迄もなく労働祭の當日であるから、元より當の江口渙は東京に出て不在である。今頃は芝浦あたりで花火でも上つてゐるか、赤い旗や、白い旗や、青い旗や、友愛會や、社會主義同盟會や、サアベルや、巡査や、角袖や、随分と物騒がしいことであらう。友愛會長も忙しいだらう、警視總監も骨折だらう、そしてわが友、江口渙も定めしあの病身を以て東奔西走してゐることだらう。渙は私の長い間の文學の友達である。近頃彼がその文學の外に、新しい思想運動の戰士の籍に這入つたことは、大方の諸君の知らるゝところである。恐らく、その方の戰士の仲間から彼は大きに歓迎せられてゐることに違ひない、よくも當今の墮落した文學道に満足しないで、君は自覺してくれた、と言つて彼は大きに喜ばれてゐることに違ひない。

だが又、十年一日の如く、變りなくその文學の方に一途に没頭してゐる私の私情からして言へば、彼が屢々この海岸で私と並べてゐた机を留守にして、筆と旗とを持ち變へて駆け出して行くのを止めたい氣がしなくてもないのである。然し、私だとしても、今の世に彼

等の叫びをどうして是認しないで居られよう。それどころか、彼等の仕事に帽子を脱いで最敬禮をすることに於いて、私は人後に落ちないものである。が、これは私の餘りに深みに落ち込んだ末の迷ひであるかも知れないが、私の彼と共に長い間奉公して來た文學の仕事が、決して彼等の仕事より一段下のものであるとは斷然思はないのである。だが、これは斯ういふ氣質を持つて生れた、斯ういふ私のやうなもの、考であつて、それも間違つてはゐらないであらう、が又、我が友、江口渙が、彼のやうな氣質を以て、今のやうな世の中にあつて、今のやうな彼になることも無理からぬ事なのであらう。それも正しいのであらう。——今日は餘り靜かな朝なので、私は珍らしく海岸の方に散歩に出て、海邊を歩きながら、遙に江口渙の健康を祝したのである。

けれども、今日、五月一日、東京ではどんな騒動が起つてゐるかも知らないが、見渡す薄曇りした靜かな海岸の砂濱を、一間おき位に何人かの漁師が各々地引の綱に結びつけた別の綱を腰に巻いて、斜めに打込んだ棒杭のやうな恰好になつて、そろり／＼と、遠くか

ら見ると、殆ど動いてゐないかと思へる程の速力で引張つてゐる。それは前にも云つたやうに、斜に打込んだ棒杭のやうにも見えるし、或ひは間隔をとつて砂濱の上に据ゑ付けた案山子のやうにも見えるのである。近づいて見ると、然しやつぱりその一人一人は逞しい眞黒な顔をした老若さまざまの漁師に違ひないので、彼等は申し合はしたやうに腕組をして、黙然として、地引の綱を腰に縛りつけたまゝで、ほつ／＼と後の方に歩いて行く。別に前の海を眺めてゐるのでもなければ、空を見てゐるのでもない、又漁が澤山あるだらうか、少なくともないだらうか、と心配してゐる模様も見えない、そして誰一人冗談も言はず唄もうたはず、中に一人二人、いつの間にかすひ盡して、火の消えてゐる眞鍮の煙管を啣えてゐる位のものである。海には殆ど風もなし、浪も立たない、誠に何とも靜かといふのか、非活動といふのか、穏やかな極と見えるのである。

だが、考へて見ると、東京と此地とでは汽車で僅一時間半の道程にしか過ぎないにも拘らず、同じ時同じ日の其處と此處とでは、例へば今日、彼地の芝浦では赤旗、白旗、民衆、

警官の押し合ひ掴み合ひの騒ぎであり、此地の海岸では屈強な漁師が案山子のやうな恰好をして、地引を引いてゐる穩さの違ひがある。そしてそれが何も今日、五月一日には限らぬのである。現について十日程前、私の部屋から斜め左に當る一棟の二階の欄干に、屢々二十歳位の色の白い、十分素人風に作つてはゐるが、確かに玄人女らしい中々の美人がちら／＼と時々姿を見せる。どうかすると、彼女は頭からすつぽりと白色のゼールを被つて、私の部屋の前の、池に掛つてゐる橋の上を通ることもあるのである。私のことだから、早速一人の女中をつかまへて、

「あの二階の女の人、いつも一人だけでしか姿を見せないが、旦那様はどうしたんだい？」と聞くと、

「あれ、古河さんのお婆さんよ、」と女中の答に、

「古河さんて何だい？」と私が聞くと、

「そら足尾銅山のさ、」と女中は私が無智であることを發見したのが愉快らしく、色々と言

明するのである。「そら、今、東京では騒ぎでせう、足尾から工六のお上さんが隊を組んでやつて来て、古河さんのお家に押しかけて来てゐるんですつて。——だから、それがうるさいから、古河さん、實はこゝにいらつしやるのよ。だけど一寸も、散歩にも何にもお出かけにならないの。」

して見ると、私ばかりでなく、鑛山主古河某も、東京から僅か一時間半汽車に乗つて出て来ると、世界が變つたやうに靜かだな、と感じ入つてゐることであらう。多分宿の女中が「奥様も御一緒にお風呂に、」とか「奥様、ピンポンでもなすつては？」とか、自分の傍にゐるものに呼びかけてゐるその「奥さん」と呼ばれてゐる人間も、東京とこの××海岸とではこれは變りも變つて、別の人間になつたやうな氣がしてゐるに違ひない。

さう言へば、私が二三度此間うちピンポン遊戯を戦はしたところの、或部屋の二十七八歳のやつぱり奥さんと呼ばれてゐる女客は、だから私も彼女と勝負を戦はしながら、「そら奥さん、今のはアウトですよ、」奥さん、今度あなたが打損なつたら又ゼロゲームですよ、」

などと呼んでゐる人物は、これも女中の報告に依ると、彼女は現に東京日本橋の〇〇藝者で、何々家何子といふ者ださうである。して見ると、もし××海岸でなくて、汽車で一時間半離れた東京の日本橋で私が彼女に會つたとすると、奥さんどころか「そら、何子、アウトだよ」「何子、今度お前が打損なつたら又ゼロゲームだよ、しつかりしろ、と言ふべきところである。古人我をあざむかず、誠に「所變れば名も變る、浪花の蘆も伊勢で濱萩」とはこの道理であらう。

五月一日、東京では労働者の大騒動があつて、××では労働者が居眠りながら地引網を引いてゐて、東京では私は戯作者と呼ばれても、××海岸では同じ私が思想上の危険人物になつて、——曰く何、曰く何、しかし何の不思議もないのである。

折柄、私の部屋の二階でコロッシャンと琴を弾じる音が起つた。それと共に合はして歌ふ聲が始まつた、但し同じ人が弾じ且つ歌つてゐるのださうである。それは二十六七歳の色の白い、女のやうな聲を出す男なのである。私はこの男とも二三度ピンポンの戦はし

たことがあるが、その時見たのであるが、彼は指に二本の石入りの指輪を差して、一度玉を打つ毎に「へ、失禮、へ、失禮、」と女のやうに首を曲けて、女のやうな聲で謝辭を述べる癖がある。一口に言ふと、誠にいや味な男である。

けれども、世は様々で、この男をひどく好く女があつて、女中の話に依ると、それは何でも新橋の藝者ださうだが、一週間に一度づゝ、やつぱり此地に來ると、忽ち奥様と呼ばれる身分になつてやつて來るのださうであるが、而も男は無一文で、すべてその女が養つてゐるのださうである。いつか偶然先に話した私のピンボン友達の東京日本橋〇〇藝者何々家何子が、この男の噂をして、「私は存じませんが、私の友達が知つてゐるんですよ。その話にね、何でも大變な女たらしださうですよ、琴をお弾きになるでせう、私、まだお目に掛りませんが、色の白い女見たいな——えい、さうです。その人です。ホ、ホ、世間といふものは案外狭いもんですわね。」

「だつて、東京とこゝとは僅か一時間半ですもの、」と私、「一體、あれは何をする人なん

です？」

「さあ、何でも……何とか大學の文學士だとかで、小説を作る人ださうですよ。身體が悪い人ださうですがね。」

・コロリンシャン……とこれを書いて居る私の頭の上では、相變らずその自稱小説家の琴の音がつづいてゐるのである。が、彼も亦何だか分つた者ではないので、先の筆法で言ふと、東京へ行つたら、案外歌劇役者か何かかも知れないのである。しかしながら、何は兎もあれ、××海岸の五月一日は斯くの如く太平極まるのである。(十・五)

——此一篇を江口渙に——

或る夕方

——青木宏峰畫會の紹介文——

上

一 青木宏峰上京の事

一 横綱大錦卯一郎の事

ある夕方、寢轉んで天井を見てゐると、大阪の青木宏峰がやつて來た、彼は僕と天王寺中學校時代の友達で、もつとも中學を出てから三四年はお互に往來してゐたが、それからずつと消息さへも絶えてゐた間柄である。随分會はなかつたね、と僕が言つたら、八年會はないよ、と彼は言つた。彼は中學を出てから洋畫を志してゐた、僕は文學を志した、自然似たり寄つたりのものを目的とした譯だから、卒業後三四年の間はよく往來したものだ。

彼は今も温厚な紳士であるやうに、その頃も温厚な書生だつた。僕はそれに反して生意氣で無頼な書生だつた。當時彼の畫を拙いと認めて屢々彼に食つて掛り、その癖カフェーに行つてはいつも彼に散財させ、工面が悪くては彼から金を借り放した。そしていつとなく往來をしなくなつて八年が経つたのである。

無論、さういふ支達のことであるから、大阪と東京と離れてゐて、直接に文通はしなかつたといふものゝ、彼の消息は始終誰からともなく僕は聞いてゐた。相變らず畫を勉強してゐるとか、畫は兎に角よく賣れるらしいとか、佐藤紅緑と非常に親交を結んで、彼の畫の師匠になつてゐるとか――。

「鍋井克之はどうして居る、寺内萬次郎に會ふか、耳野三郎は、美術學校の講師になつたとかいふ三浦秀之助は、大燈閣社長久世男三は、布施延雄は？」と青木宏峰は八年振りで僕の顔を見ると、斯ういふ人々の消息を僕に聞くのだ、彼等は悉く天王寺中學校の出身で、克之を除いて悉く僕と同じ級で、延雄の外は皆畫家なのである。

「克之は畫の外に小説を書き出したよ。外の人々には會はないよ。延雄は翻譯をしてゐるよ、」と僕は答へた。

「細川はどうだい、景氣は？」と彼はやはり同じ中學出身の別の者に就いて尋ねた。これは畫家でも文士でもない、極めて風變りな職業をしてゐる人物なのである。

「さあ、」と僕は答へた、「細川……？ 彼ともやつぱり君と會はない位會はないが、久し振りで張出しから正横綱になつたんだから、それにもう財産が八十萬圓も出來たといふから景氣はいゝ方だらうな。」

「さうだらうな。」

細川といふのは、近頃日の下開山の太錦卯一郎のことである。そこで、僕は宏峰に答へて、僕が卯一郎に最後に會つたのは駿河臺の、やはり或中學の友達の下宿で、やはり八年位前のことだらう、その時彼はやつと結へる位に延びた髪の毛を無理に引詰めてゐたので痛さうに目が吊り上つてゐたが、その爲に少し盆鎗に見えた昔の顔と違つて中々きつく見

えたこと、兩方の耳の穴が、皮膚の肉が無茶苦茶に潰れて閉がつてゐたので、僕が驚いてどうしたんだと聞くと、これは張手といふ奴で、誰も皆斯うなつてしまふのだと答へた、痛いだらう辛いだらう、と僕が重ねて聞くと、禪かつぎの大錦卯一郎はなアにさうでもない、それにお蔭で少し教育があるので、外の新参者と違つて、一錢で芋を買ひに遣らされたり、禪の洗濯をさせられたりはしないで済む、その代り女郎に出す手紙でも、何でも書く事の代筆を始終仰せつかるのは閉口だ、然し僕も中學の校長に殆ど破門せられた形で、こんなものになつたんだから、大にやるつもりだ、人一倍稽古を勵んでゐる、見てみてくれ給へ、と然し心細さうに威張つてゐたことなどを話した。

下

一 様々の教員氣質の事

一 青木宏峰が展覽會の事

「黒頭巾事横山健堂といふ人は僕等の中學校の先生ださうだね、」と青木宏峰は言つた、「い

つか中央公論か何かに大錦を論じた文章の中で『わが教へ子』と呼んでゐたが、あんな先生を僕は覚えてゐないが、君は？」

「鍋井克之は教つたさうだ、」と僕は答へた、「だけど、その一年後の僕等の入つた時はもうゐなかつたんだ、大錦の卯一郎は僕等より又二三年下だつたから、彼が黒頭巾といふ人の名前と顔とを知つたのは多分大關になつてからだらう、彼は文學雜誌など読んでゐないだらうからな。」

「だけど『我が教へ子』と確に書いてあつたやうに思ふがね、」と正直な宏峰は言ふのだ。

「それはつまり例へば東海道の汽車を黒頭巾は沼津で下りて、大錦は静岡から乗つたといふ譯だ、そこで君と僕とは同じ汽車の沼津迄火夫をしてたんですと言ふ位のことだよ、」と僕は説明したものだ。

さういへば彼が力士などいふ藝人になる心得違ひを罵つて、今日限り勘當すると宣言した昔の中學校の校長が、彼が始めて鳳に勝つた當時、朝鮮の中學校にゐたのだが、偶然

東京に来てゐて、それを見て、彼の部屋に尋ねて行つて、わざ／＼朝鮮から我子の晴の初陣を見に来たのだが、こんな嬉しいことはない、とか何とか言つて、新聞記者の寫眞に並んで、ニコ／＼寫眞見たいに笑つて寫してたのを知つてゐるか、又それより少し前のことだが、やはり前の中學の角力好きの教師が卒業生その他の有志を募つて、彼に化粧廻しを送つたところが、教師の身分で藝人に物をやる運動をしたといふので、免職になつて、卯一郎その他が色々と學校に泣きを入れたが、結局聞かれなかつた、今では洗濯屋をしてゐるといふのを知つてゐるか、とそんな話も出たものだ。

ところで、當年、卯一郎とは正反對の、紅顔の美少年であつたところの、宏峰は級の柔術の選手だつた、彼は身體つきの華車なのに似ず、柔術は中々巧かつた、卯一郎は力は多少馬鹿力があつた方だが、業は拙劣だつたので、宏峰と卯一郎とは勝負に於いて、少くとも三と二と程の割合で前者の方に強味があつたものだ、さういへば卯一郎は以前はそんなに大男でもなかつた様だが、一年中毎日身體を以て轉んだり轉がしたり、叩いたり叩かれ

たりしてゐたら、誰もあんな風になるものに違ひない、宏峰だつて校長に破門される覺悟であの時卯一郎と一緒に角力取になつてゐたら、本朝に今一人の名力士が殖えて、今頃は
大關宏ヶ峰とか何とか、美男の力士の名を歌はれてゐたかも知れないことだ。

「さうかも知れないな、」と温厚な宏峰は苦笑しながら言つた。

だが、年も丁度卯一郎と同年の宏峰は、僕が彼等と會はない八年の間に、一方が角力を取り續けて横綱になつた間に、彼は書をかきつゞけて、来る二十三日から白木屋に繪畫展覽會を開くといふのだ。やつぱり角力になつた方がよかつたのと思はせるか、よくも畫をやつた天晴れやり甲斐があつたと感嘆させるか、僕は今からそれが開かれて、彼が八年間の努力の果を見に行くのを楽しんでゐるものである、さう言ふ譯だからこの文章を讀んだ人々も、その一人でも多くが彼の展覽會を見に行かれんことを。――

——「とこんな風に書いて、僕見たいな門外漢の變な批評なぞしないで、批評は見る人々に任して、漫然と、始めて東京に現はれた青木宏峰といふ人物を披 露するだけにしとい

の方がいいだらう、ね、その方が……」と僕が言つたら、

「結構だ、」と濃厚な宏峰は苦笑しながら點頭いた。

そして僕たちは八年振りて手を取つて散歩に出かけたことである。(九・九)

東方優勝會の日

僕は随分變な文士に見られたものだ、現にこの一文をその爲に書く「新潮」の記者にしても、今だに僕に小説を頼みに來たこともない癖に、今度も斯うだ、——どうも近頃の「新潮」の「作者の感想欄」が變に堅苦しくなつて來て困つてゐる、一つ此際あなたに出て貰ひたい、と、何の事はない、芝居の藝題で言ふと、大切二輪加とか、中幕心中物とか言つた扱ひだ。けれども、僕中々好人物で、苦笑しながら引受けて、さて、思出すのはその二三日前に、僕を訪問して來たところの、やつぱり僕を變な者扱ひにした一人の未知の男のことだ。その男といふのは××文房具製造會社の番頭とかで、僕に先づ、これは甚だ粗末なものです、と言つて水引を掛けた文房具らしいものをくれた。僕、元來、貸した金でも先方から返して來ない限り、大抵なら催促をしない主義であると共に、くれようと言ふも

のなら賄賂でも何でも貰ふ流儀であるところの僕は、それは有難う、と言つて即座に貰つてしまつた。ところが、その男の言ふことに、

「先生に一つお願があるのですが、と申しますのは、先生は誠に御健筆ださうで、私共の製造致します鉛筆及び万年筆は……」と言ふところに依ると、それは舶來品以上のもので、就いてはよく今迄は商品の廣告に藝者などを使つたものだが、「一つ、先生がその万年筆を持つて机に向つて居られるところを、寫真に取らしていただきたいのでございますが……」と言ふのだ。

けれども、僕は即座に先に文房具を貰つた恩義を忘却して、言下にその申出には辭退の意を述べた。ところが、その文房具番頭は忽ち話題を轉じて、それ迄の話などは、まるで他所の人の話見たいにけろりと捨て、しまつて、

「外國では、例へば諾威國のビョルンソンといふ文豪が佛蘭西で客死した時には、その國の政府から軍艦でその遺骸を引取りに行つたとか、又或文豪の五十年の誕生の日には、そ

の人の住んでゐる町の人が總出で提灯行列をしたとか、大變な騒ださうでございますが、且本では、斯う申しちや何ですけど、先生方はその道の外に出ると、一向、何と申しますかな？ さうです、社會的地位といふやうなものがないといふんでせうな、誰も先生方のお名前さへも知らない、といふ有様で、誠に早や嘆かはいしい事かと考じます。早い話が河原乞食の役者や、遊女の藝者衆の方が、先生方よりずつと顔を廣く知られてゐるといふ有様でございます。で、私の方の會社は、一番、何よりも先生方と縁故の深い者でございますので、いや、これは決して何も文房具を持つていたゞくといふやうな、廣告の爲ちやございません、唯先生方のお寫眞を繪葉書にして、坊間に賣出したいと思ふんでございますが……(中略)例へばです、先生などに致しましても、失禮なことを申すやうでございますが、世間ではやれモンスタアだの、やれカメレオンだのと申してゐますが、まあ、一體どんな方だらう、と随分お顔を見たがつてゐるものもあるかと存じます。それに今迄先生方を知らなかつた者でも、つい繪葉書屋の店頭で見馴れるにつけても、いつとなく、先生

方がこれ迄は人間の精神的の位置ばかり占めて居られた譯でございますが、さうなると、自然、社會的の、即ち物質的のすな、位置もお出来になるやうになるかと存じまして、私どもの社の發行といふ事にして賣出したいと思ひまして、先づ先生に第一に御承諾を願ひに上つたやうな譯でございますが……？」

「それなら、始めはもつと美男の文學者たち、例へば島崎藤村とか、里見弴とかにお願いして、僕などはその繪葉書の第二輯の時に編入して貰ひませう、」と僕が答へたところが、それには文房具番頭は色々勧誘の辭を盡して、容易に意見を撤回しなかつたが、僕は「第二輯の時に」一點張りで、やつぱり應じなかつたものだ。すると、彼は三轉して、

「その文學者の社會的地位といふことと、」と次第に演説口調になつてつゞけるには、「即ち一般に民衆に文學者の先生方と顔馴染にさせるといふことと、それには今申し上げましたやうに繪葉書利用が最も適當だと思ふのですが、更に一層低級の人々に親しませる爲に、我々文房具會社の第三の計畫と致しまして、これ迄ありますところの、長者番附とか、

藝人番附とか言ふやうな形式で、當世小説家番附といふものをこしらへたいと思ふのですが、それを必ず十分のお禮を致しますから、先生に御作成を願ひたいのでございますが……例へば、先生はまあ、新進の、お元氣のいゝ所から、何處となく放膽なところは、角力と言ふと『大潮』といふところでせうなア、」と番頭はしやあしやあとして僕を持上げるのだ。僕も面白いので、

「では、この、」と僕の家の座敷から眞裏手に見える江口渙の家を指さして、「江口渙は？」と聞くと、

「はッ、江口先生ですか、」と番頭は即座に答へるのだ。「江口先生も、亦お元氣のいゝところは、さあ、紅葉川といふところでせうな。」

そこで、僕はこの前彼と、外に久米正雄、菊池寛との四人で角力を見に行つたことを思ひ出して、「では、久米正雄や菊池寛はどんなものでせう？」と聞くと、

「久米先生は、」と文房具番頭はもうちやんと一度考へて來たことのやうに、僕の言下に、

「久米先生はどこかゆつたりして、愛嬌のあられるところは三杉磯ですな。菊池先生は、あの骨格から、堂々としてられるところ、どうしても大關千葉ヶ崎ですね。」

「それぢやあ、大關や關脇ばかりで、文壇には外に大勢人がゐるのに、番附が出来ないぢやありませんか？ そんなに皆に位をやると、横綱が三人や四人ぢやあ追付きませんよ、と僕がやり込めたつもりであると、番頭は少しも抜からず、

「だから、それを先生にお願いに来たんです、」と言ふのである。

「それは、」とそこで僕は言つたものだ。「文壇にだつて、行司や呼出しや年寄に當る人物が澤山ゐるんですから、そこへ行つたらいいでせう、僕のとこへなぞ来るのはお門違ひですよ。」

「それはどういふ方ですか？」と相手が聞くので、僕は、例へば森鷗外とか、坪内逍遙とか、生田長江とか片上伸とか、さては宮島新三郎とか、等々々、と答へておいた。

そして、やつとのことで彼は僕のところから空しく歸つて行つたが、恐らくその彼も何

處か、僕見たいな怒らぬ文士のところを襲つて、悩ましてゐることであらう。

ところが、その同じ日の午後の事である。僕が例の晝寢をしてゐると、久米正雄と菊池寛とが尋ねて来て、これから上野精養軒にある大角力東方優勝旗の園遊會へ行かないか、江口渙も今誘つて来たから、と言つて勧めるので、僕も早速身仕度を整へて、同勢四人で出かけて行つた。これはかねてその會の發起人の一人とかである新潮社の中根駒十郎から菊池寛と久米正雄と江口渙と竹久夢二との四人に宛て、招待状が行つたのを、當日夢二が行かなかつたので、僕は、外の三人の正式の招待状を貰つた人たちと共に、夢二に化けて、彼の招待状を持つて行くことになつたのである。

ところが、自動車や車が百もその前に止まつてゐるところの精養軒の會場の入口で、黒紋付に袴を穿いた幹事らしい男に各々その招待状を渡すと彼は招待状の宛名に書かれてある菊池寛、久米正雄、江口渙、竹久夢二といふ名前を蚤の如くに見過ごして、一枚受取る一枚手の平の中に丸めては、それを傍の紙屑籠の中にほり込み、それと共に寛も正雄も

渙も夢二もあつたもんぢやない、一人づゝ肩を捉まへてとんと會場の中へ突き入れたものだ。それが事の始まりで、あの狭い精養軒の庭の中に、文字通り溢れるやうに群がつてる人々の中を、寛も正雄も渙も夢二も唯右往左往にさ迷ふ外はない譯なのだ。目に立つものは新橋柳橋霞町などから、接待役に来てゐる百の藝者たちの赤や紫の着物を着た、到座我等の日常生活の中に入つて来ないところの美女たちと、さては千葉ヶ崎とか、大潮とか三杉磯とか呼ぶ大男たちの、群集の頭の上に聳え立つ、大きな頭ばかりである。

「あゝ今通つたのは霞町の……」と時に正雄などが物知り顔に言ふのだが、その言ひ方さへ一寸も底力がない上に、當の噂された十五歳の半玉はしやなり／＼と尻目もくれずに通るのだ。

さすがにそこ等へ来てゐる、斯ういふ園遊會に招待されるやうな外の人たちの中には、それ等の美女たちに、「まあ暫く、」とか、「先日は失禮、」とか聲を掛けられたり、或ひは彼女達の肩を叩いて、「馬鹿に澄ましてるね、」とか、「あんまり浮氣すると言つ付けるぞ、」などと

呼びかけてゐるのも應々見受けられて、中々豪勢なことだが、それも寛や正雄や渙や夢二には何の關係もないのである。彼等は唯くち／＼に、「大變な人だな、」「どうにもしやうがないな、」などと心細い聲で言ひ合ひながら、不忍池に向つた築山の段々を、人に押されながら下りて行つた。すると、そこにはおでんや、サイダやビールや、團子や、強飯などを振舞ふ店が並んでゐて、例の藝者たちが、蜂のやうに群がつて来る人々に、菟藪の串や、サイダ杯をくれてゐるのだが、何處にも彼處にも悉くお祭の喧嘩よりも大勢の人が、雪崩を打つて押し寄せてゐたものである。

「俺たちも一つ何か貰つて食はうぢやないか、」とその時寛が多分に四國訛を帯びた發音で提議したが、連の中に誰も即座に「よし、行かう、」と勢よく答へるものがないので、彼は「ぢやあ、俺が一つ行つて来る、」と言つて、サイダの前の群集の中に割込んで行つた。群集が右に左に波のやうに揺れる中に、彼も暫くその彪大な身體をそれと共に揺られながら、人と人との間を店頭まで分けて入らうとするのだが、さうでなくても難しいところを、彼

の大きな身體はやつと半分割込んでも、それ自身の彈力で直に後に彌ね返されるのだ。で二三度試みてゐるだが、とても駄目だとあきらめたと見えて、今度は二三軒隣の、そこは稍群集が少いと見えた團子屋の前に、彼は突進んで行つた。だが、行つて見ると、そこでも群集は容易に寛一人を中に割込ませないのである。二三度彼はその身體の三分の一程人込の中に隠したかと思えたが、その度毎に無残に彈ね飛ばされてゐるが、やつと、今度は三分の二までを人々の間に突込んで、その間大凡二三分間も、波に浮かんであるやうに、右と左に人々と一緒に揺れてゐるが、忽ち彼自身が出ようとする力と、人々が押し退けようとする力が加はつて、一間ばかり左の方に彈ね飛ばされたところを、ぐつと満身の力を足に込めて立止まつた時に、見ると両手に鎗紛が殆ど剝落して、白い部分の方が多いところの團子の串を二本づつ擱んでゐるものだ。そして、

「やあ、貰つたぞ、貰つたぞ！」と寛は童顔の相恰をくづして叫びながら、待つてゐる僕等のところへ歸つて来て、それを銘々に一本づつ、桃太郎見たいに分けてくれた。それが

ら、手に手に團子を持つて、寛と正雄と渙と夢二の僕とは、雲霞のやうな人込を押し分け押し分けられつ進むのだが、それが中々思ふやうには歩けないのだ、人込は藝者が力士の外は、寛や正雄が通つたとて、一向敬意を表さないのである。すると、その時ちやらくくと金屬製の杖を引きする音と共に、太鼓が鳴つて、何かの行列が人込の間を縫つて行くらしく、僕たちの二三間向ふに、その氣配がした。

「何だい、あれは？」と正雄が延び上つて、その方を見ながら言ふと、

「吉原藝者の手古舞だ、」と渙が辛うじて人込越しに、それ等の頭の先でも瞥見したものと見えて、斯う答へた。

「傍へ寄つて見ようぢやないか？」と正雄が大きに景氣をつけて言つたが、誰も「行つて見よう、」と應じないのだ。すると、正雄は如何にも齒搔ゆさうに、「駄目だな、駄目だな、」と僕等を勵ましたが、それでも一向効果がないので、彼も斷念したと見えた。やがて僕たちは再びぞろぞろと群集と共に揺られながら、手古舞の一行とは反對に、今し方下りた築

山の坂を上つて、「優勝ランチ金貳圓」と書いた紙のビラの下つてゐる食堂の前に出て、奮發してこゝへ入らうぢやないか、と言ふことになつたが、さて、こゝでも僕たちの一行が中へ入らうとすると、入口に番してゐた大人のボーイが、寛と僕とに向つて、帽子や外套を着たまゝは入れません、と權柄づくにきめつけたのを始めに、その癖、室内には藝者や彼女等の馴染客らしいのや、力士やが、傍若無人に食ひ飲み且つ喋つてゐるのだが、しかし、その中に僕たちは團子を食ひ終つた口を拭き拭き入つて行つて、やつと片隅の空いた卓に着いたのはよかつたが、次にはいくらボーイに食事を命じても、十分待つても二十分待つても、皿を運んで來ないので、寛が催促し、正雄が催促し、渙が嗷鳴り、僕も驥尾に附して叫んだが、やつぱりボーイは空返事ばかりして、料理場から出來て來るピフテキの皿も、フライの皿も、ビールの杯も、悉く僕等の卓を素通りして、藝者や力士の席に運ばれるのである。

そこらには大潮も、譬へ話のでなくて、實物のがゐるのだ、紅葉川もゐるである、三杉

磯も、千葉ヶ崎も、一つの食卓から他の食卓に引張り風になつて、横行してゐるのである。嘗て新潮社の出入商人の小僧だつたとか言ふ、阿久津川だつて、大きな顔して通るのである、「あれ、阿久津川だよ、」ほう！ あれか、阿久津川！」「阿久津川々々々！」と、その日の午前文房具會社の番頭に依つて、大關や關脇に擬せられた文士の僕たちは、ひそくと囁き交して、阿久津川を黙つて目迎し且つ目送したことであつた。

その時、向ふから食卓にゐた一人の髭の洋服紳士が、突然立上つて、

「お、おう——潮！」と叫んだ、すると、食堂中の人々がパチ／＼と拍手した。寛も正雄も渙も僕も、首を縮めて目を見張つてゐると、

「千葉ア——ヶ崎！」と又別の卓子の、別の男が立つて叫ぶのだ。そして僕等は三十分以上空しく料理を待ち侘びて、結局水一杯當てがはれることなしに、「不愉快だな、」「愉快ぢやないね、」「不愉快だね、」と到頭始めて本音の言葉を吐きながら、食堂を出たものである。出際に、寛は一人のボーイを捉まへて、

「ちつともサーブをしてくれないぢやないか、怪しからないぢやないか！」と身體に似合はず細い、訛りの多い言葉で憤慨を洩らしてゐるが、

「少し待つて、下さると持つて行きますよ、」と木で鼻をく、つたやうな挨拶をされてゐた。

「三十分以上待つたよ、」と寛が言ひ返すと、

「さうですか、」とボーイはつんと答へたきりだ。

それから、寛を先頭に、僕が殿で、口々にぶつ／＼言ひながら精養軒の會場を出ようとした時、僕は出口のところでおや？ と僕に目を見張らせたところの一人物に出遭つたのである。

「やあ、」

「やあ、」

と双方で聲を掛けて、立止まつてお辭儀をして、双方とも一寸口をもぐ／＼さしたが、結

局何にも言はずに、

「ぢやあ、さやうなら、」

「さやうなら、」

と別れたものだ。寛も正雄も渙もその光景を知らずに先にずん／＼進んで行つたので、僕は五六歩彼等より遅れたのを大跨に歩いて追付きながら、道理で、あの文房具會社の番頭め！今朝僕のところへ來やがつた時、東方力士の名前ばかり並べやがつたわい、と思つたのである。

却説、僕等四人は「ひどいね、」不愉快だね、「案内人の新潮社の中根駒十郎に今度遭つたら大いに憤慨を洩らさうぢやないか、」などと言ひながら、山下に出て、そこで一寸立止まつて、相談して、それから松阪屋デパートメント・ストアに行つたものだ。そしてエレベーターでつゝとその四階に上つて、食堂に入つて、簡便食事「幕之内」の握り飯を頬張りながら、さうして腹が出來ると罪のないもので、さらりと今し方の不平を流して、話は一

轉して話題は近頃流行の社會小説、講談小説、感想小説、等々に就いて盛んに意見を交換したものである。

そこで、寛が何と言つたか、正雄がどういふ意見を吐いたか、渙が如何に論じたか、そして僕自身もどういふ感想を述べたか？……………

その肝腎のところ既に與へられた紙數を超過してしまつたので、残念ながらこの筆を擱かねばならぬ。(九・六)

旅の日記

九月一日。一緒に來た廣津が一昨日、約束した原稿が出来ない斷りにと言つて、東京に歸つてしまふし、大體この諏訪に來てから一週間以上にもなるが、一日として晴れた日に會はない、昨日も雨、そして又今日も雨、温泉宿の雨は結構かも知れないが、最早や少々ならず退屈を感じる。いつそのこと藝者でも呼んで騒いでやらうかな、と昨日も思つたことを又思ふ。これで、子供の頃色町の中に育つたものだから、藝者を友達にしたことは随分あるが、客になつて彼等と對した經驗は極く少ない方なので、それに酒を飲まないしするので、中々その勇氣と興味とが十分に出ない。

午後。大體僕は旅にあまり荷物を持つて行くことを好まない、今度なども風呂敷に原稿紙とペンを包んで來た切りなので、退屈しても讀むものさへ持たない。仕様がないので、

宿から貸してくれた。並大抵の退屈さでは手の出さうにもない、『佐久間象山全集』とかいふ、菊版數百頁もの字引のやうな大きな本を、一寸開いて見なぞしたが、コロタイプ版の口繪の、象山の上手な書も、晝も、拾ひ讀して讀む漢文で書いた彼の傳記も、すぐに興味がなくなつてしまふので、いつそのこと歸らうか、と時々思ふ。だが、さて東京に行つても、待つてゐるといふものがあるではなし、是非歸らなければならぬといふ用事があるではなし、と思つて自分の現在起臥してゐる八疊の部屋を見廻して見ると、蒲團(註。僕は晝間でも敷かせてあるので)、机も、床の間の状態も、椽側に置いてある特に僕に貸してくれた籐椅子も、さてはこれも特に貸してくれてゐる蓄音機も、部屋の隅にある煽風機も(これはもう用ふどころか、目下袷に袷羽織で寒い位だが、夏ならば、これが僕のために動くのだと思ふと、甚だ愉快である、無論女中の怠慢で未だ取片附けられずに置いてあるのだ)それ等は東京の僕の下宿などには一つとしてないものだ、歸つたとて、當分、いつになつたら、それだけの物等にかしづかれるか分らない、なぞと思ふと、さう輕卒に歸る氣になれない。

例に依つて、退屈が嵩じると湯にはひる、湯の中で、文學好だといふこの家の若主人と會つた時の會話――

「お退屈さまでございます。何にもおなぐさみになるものがございませんでして……」

「藝者でも呼んで一つ騒いで見ようかな？」

「結構でございます。え、へへへへ。」

「この町には藝者の數はどの位あるんです？」

「さやうでございます。遊廓のを除きまして、一本のものが……五十人は居りますでせうな。」

「大さう繁昌ですね、」と僕、「ぢやあ 本當に今夜は一人呼んで貰ひませうか。」

「承知いたしました、」と相手は三十に足りない年頃らしいのに、五十位の人によく見る、顔ぢゆう火傷の痕見たいに見える、つるつる光つた顔を、手拭で撫でながら、「ですが、と

でもあなた方のお氣に召すやうな者は、田舎のことですごくいますから……え、へへへへ、」
と言ひながら笑ふ。

「なアに、そんなお世辭には及びませんよ。近頃は御承知の通り昔と違つて、小説家と藝者とは縁がなくなりましたのでね。僕なんぞ宴會の外に藝者と同じ座敷で會した経験がない位ですよ。」

「御冗談ばかり……え、へへへへ。いや、もう藝者などといふ者は微が生えてゐますから、旦那様方はもつと新しいものを、え、へへへへ。さう申せば、近頃の小説にはあんなり藝者が出ないやうでございますねえ。」

「うつかり藝者などを出さうものなら、戯作などと言つて、仲間うちでも輕蔑される位ですからね。……近頃は、さうですね、カフェーの女ですね。」

「こちらにはどうも、田舎のことですから、それはお生憎さまで……ぢやあ、藝者はどんなのを？……」

「そんな譯ですから、どんなのでも不服は言ひませんよ。」

「あんまり若いのより、」と何と思つたのか、宿の若主人は僕に、「二十一、二三といふ方が……え、へへへへ、」と一流の笑にまぎらして推薦する。だが、無論、僕もそれに賛成すると、「一昨日お披露目をしましたので、ゆめ子と申すのが……もつとも一年餘り休んでゐまして、今度出たのでございますが、お酌から出てゐる女でございますから、どうにか藝者の形をして居りますですから……」と言ふので、それにも讚成する。

それが午後の二三時頃だつたので、夜になると、いつとなく僕は藝者の事を忘れてしまつて、もつともその間に二三度、本當に来るのかなと一寸思つたが、夕食後又湯にはひつて、湯から出た元氣で、煙草をすひながら『佐久間象山全集』をひろけてゐると、突然「今晚は……」といふ優しい女の聲と共に、すーつと唐紙が開いた。そこで部屋に入つて來た女を見ると、驚いたことには、洗ひ髪に、銘仙の着物を着て、紙のやうな縮緬の羽織を引掛けてゐる。年頃は二十二三の、すんぐりと太つた、丸顔の、白粉を剝がしたらそばかす

だらけらしい。こいつは少し酒でも飲まなければたまらない、と思つたので、早速酒を命じて、机を挟んで、女と、つまりこれが藝者なのだ、對座した。

「君がゆめ子さんかい？」と僕が聞くと、

「いゝえ、私は……とんほ、どうぞ宜しく、」と彼女は柄に似合はぬ可愛らしい聲で答へる。

突嗟の間に、ゆめ子がゐなかつたので、代りの者を呼んだのだな、と察する。早々にゆめ子の話は撤回して、兎に角、酒を飲みながらいろいろ話をすると、女は東京の淀橋の者だといふ。何かの時に、

「あなた、東京へいつお歸りになるの？」と彼女が聞いた。

「僕は別にこの土地に用事がある譯ではなし、といつて東京にも用事はなし、いつ歸つてもいゝし、又いつ迄もいてもいいのだ、」と僕は答へた。すると、相手は何と思つたのか、

「明日か、明後日お歸りにならない？　そしたら私も東京へ一寸行きたいと思つてゐるんだから、連れて行つて頂戴な？」と笑ふと鯨のそのやうな恰好になる目をして、その丸

い顔を、それでもやつぱり女らしく、色氣たつぷりに傾けて、姿に似合はぬ優しい調子で言ふので、（男といふ奴は甘い者だ！）

「一緒に歸つてもいいよ、」と僕は答へた。

「ぢや、明後日と決めておきませうね。明後日のお晝頃、もう一遍かけて下さいな、」ととんほは言つた。

宿屋に箱は入らないのだが、僕が退屈なままにポツン／＼と弾くために、宿屋から借りてある三味線を出して、女に爪弾をさせる。拙くて、おまけに何にも唄を知らない。仕様ががないので、土地の木曾節と伊那節を幾度も幾度もやらしてゐるうちに、十二時近くなつたので、「ぢやあ、明後日、」と約して歸す。

藝者とんほが歌つた伊那節の一つ。

〽惚れちや又やめ、又惚れちや止め、それぢや出雲の帳よごし。

——日。　久し振りて晴天、湯に入つて、朝飯を食つて、又湯に入つて、縁側の日向

の藤椅子に仰向けになつて、考へるともなく、越し方、それから今の身の上を（行末は考へない）思ふと、何だか今の身の上が餘り氣樂過ぎて、夢ではないか、と自分と自分のからだを抓つて見たいやうな氣がする。だが、やつぱり夢ではないのだ、と思ふやうな今の身の上である。人間といふ者はなさないもので、身を以て過ぎて見なければ何にも分らないが、子をもつて知る親の恩、女房をもつて始めて知る、何といふ獨身の有難さ！

さて、僕は目下その獨身の氣樂さに浸つて居る身の上であるが、斯うして白雲の飛ぶ高原の青空を見るときもなしに見ながら、温泉宿の日向の廊下の藤椅子の上に寝轉んで、思ふともなしに思ふには、自分は何事に對して、何者に對して、何の責任を感ずることもなく、何の主張もなく、何の意見もなく、誰を恐れることもなく、誰に憚らるることもなく、金さへあれば又何をしようと思ふこともない、善藏が所謂「糸目の切れた奴鼠」、あまりに呆氣ない、だが、さても氣樂な身の上であると思ふのだ。人間といふものは妙なもので、束縛があればあるで困り、なければないで又不平なやうな氣もするが、……もつたいたい、

もつたいたい、と思つて、藤椅子を下りて、早々に蒲團の中に入つて、（寢に行くのではなくて、これは僕にとつて仕事をしにだ）これもやつぱり退屈なあまりにだが、『苦の世界』の續篇を少しばかり書きつづけてゐると、宿の女中が新聞をもつて入つて來た。

そこで、早速ペンを擱いて、仰向けになつて、その新聞を隅から隅まで讀む。この頃大分方々の新聞の月評で、自分の小説の賞めてあるのを見かけるが、同じ自分の書いた『近松秋江論』といふものには、餘り振り向いてくれない、振り向いてくれるのかも知れないが、月評や何かの筆に上らない、遺憾に思ふ。と同時に、同じ水商賣、人氣稼業であるに違ひない諸文士等が、競つて小説を書いて、評論を書かないのも故ある哉と思ふ。それとも又秋江論は評論にあらず、戯文なりとでも見られたのか知らず、サアサ、何でもよいわいな。

午後、東京の友人二三の寄せ書きで、某カフェーから「今夜は君の好きな、そして久米正雄の好きな、B——さんが非常に機嫌がいい。珍しくいい、早く歸つて來給へ、」といふ

やうなことを報告して来た。それを見ると、やつぱり東京の銀座あたりが懐しくなつて、直にも歸らうかと一寸思ふ。だが、早まるべからず、と考へて、「あのS——といふ女は三百六十五日のうちで、機嫌のよい日はその四分の一もない。僕は因果な性分で、機嫌のよい日が少ない故に、機嫌のよい日のS——が好きなので、ハテ、さて、先月僕が行つた時のあの恐ろしく機嫌の悪かつた日から指折り數へると、君等の葉書を見て、早速喜んで飛んで歸りたいが、待て待て、丁度僕が歸る時分が彼女の『毎月病』の時分にあたる、止めよう止めよう」と一矢報いておく。

そして夕飯の時に、「今夜は藝者はどうしませう？」と女中の間に、「呼んでくれ、誰でもいい、」と答へたら、七時頃にやつて来た女が、後で聞くと、昨日話の出たゆめ子なのであつた。

ゆめ子、年二十一歳、亥の二黒、背はすらりとして高い方で、僕は彼女の、現今特に女類に影をひそめた觀のある、撫肩を特に愛する、顔はしやくれ顔で、お世辭にも美人の稱號は許し難いが、始終俯向き加減で言葉少なく、髪の毛は太い質でおまけに癖があるのだが、そのため結び立てらしいに拘らず、髪の恰好が心持ち投げやつたやうに傾き加減なのが氣に入る、さうなると、彼女の少々味噌齒であるのさへ氣に入る、それに昨夜の藝者とちがつて、着物から帯はいふに及ばず、櫛から、簪から、半襟から、指輪から、帯締に至るまで、田舎のには珍しく贅澤であるのも嬉しい。一見して「抱え」でないことは勿論、「看板借り」にしても、特にいい旦那がついてるものだらうと鑑定する。と、一年半ほど休んで、二三日前にお披露目をしたばかりだ、お酌から仕上げた藝者だが、といふ話を思ひ出して、僕はいろ／＼な雑談の後、半分出鱈目で、

「一年あまり休んでたんだつて、病氣で？……赤ちゃんは達者？」と眞顔で言ふと、相手は眞赤になつて、一層俯向いて聞えない程の聲で、

「まあ……どうして御存知なの？」と言ふ。

そこで、この女、子供を生んだのだと知る。で二言三言で子供の話は徹回して、又雑談

をしたり、三味線を爪弾でおもちやにしたりして時を過す。

だん／＼聞いて見ると、このゆめ子は「抱え」どころか、「看板借り」どころか、藝者屋の娘兼主人で、現に彼女の母親が上諏訪で藝者屋をしてゐて、彼女自身もこの土地で、二人の抱え妓を置いて、出てゐるとのことだ。

「旦那とは仲よく暮してゐる？」と僕が聞くと、

「いゝえ、」と彼女はやつぱり下向き加減で、一寸上目で僕を見て、軽く頭を振つた。大體僕には斯ういふ、音無しいのは何よりだが、あんまり正直過ぎるのは困るのである。けれども、そこが少々惚れた慾目で、それさへこの人間に限つて餘り氣にならない。「子供のお腹にゐる時分に、譯があつて別れましたの……」と消えるやうな小聲で、而も極めて簡單である。だが、段段と話してゐるうちに、この女は正直だが、そんなに馬鹿でないことが分つて來たので、僕は益々好きになつた。それだけがすつかり手練手管なら、僕は益々この女が好きである。

その晩の僕と彼女との對話の一端――

「私、あなたのやうな御商賣の方が好きですわ、」とゆめ子。

「僕の商賣つて、どうして知つてるの？」と僕。

「この旦那に聞きましたもの。」

「兎に角、お互に水商賣だからね。僕だつて女に生れたら藝者になるよ。藝者は面白いかい？ 止められないだらうな、不平言ひ言ひ、僕も止められないんだよ、面白いとは思はないがね。しかし、内心はやつぱり面白いのかな？……この町には蜜豆屋は勿論だらうが、貸本屋はない？」

「えい。」

「ぢやあ。僕は貸本屋をしようかな、藝者を相手に。これでもう五年か十年を年をとつたら、そして色氣がなくなつたら、いゝをぢさんになるよ。實際は藝者屋になりたいんだがな。君んとこの主人にならしてくれないかな？」

「子供があつても……？」

こゝで僕は沈黙して、やがて唄と三味線にとりかゝる。いろ／＼彼女にひいて貰つてゐるうちに、「わしが國さ」をやり出したところが、半分忘れてゐたので、それは實は僕が辛うじて弾き得る四つのうちのその一つなのだが、一寸貸して御覽と三味線を相手から受取つて、それを弾いて聞かすと、客の弾ける三味線はラツパ節かさのさ節しか聞いたことのない田舎藝者の悲しさ、ゆめ子は非常に感じ入る。僕は大いに面目をほどこす。

ゆめ子のうたつた伊那節の一つ。

「伊那のたひらに蘆なら二本、思ひ切るよし、切らぬよし。

その返しに、僕の、母から教はつた、うろ覚えの端唄。

「はつね聞かせて春告鳥や、人の心もしら梅の、かごとがましく嬉しなき、戀がうき世か浮世が戀か、一寸ひと筆けさう文。

彼女が歸つて行つたのは規則を破つて、既に夜中の二時前。

一日。　　ひる前、ゆめ子、蓄音機のレコードを十枚ばかり持つて尋ねて来る。一緒にひる飯を食べる。この女の又御飯の食べ方がひどく僕の氣に入る。これは僕の慾目ではなく、多少氣取つてた爲からでもあらうが、それにしても東京の一流藝者と並べて膳に向はしても決して恥かしくないと思ふ。

……なぞと書いて行くと、僕の例の小説と同じで、話に目鼻のつく迄には、まだ／＼この五倍も十倍もの紙数を要するから止める。のだが、これだけでも飛んだのろ氣を聞かしたやうな譯であるが、だから讀者諸君、人の日記などを讀まうといふやうな心掛は、以後つつしむがよい。

一言附け加へておきたいのは、その前々日に來た洗ひ髪の藝者とんほこと、僕が東京と一緒に歸らうと約束して、この日こちらからかけてやる約束をしておいたのを、ゆめ子故に忘れてしまつたのだが、彼女はその後東京へ逃走してしまつたといふ噂を、その後耳に

した時には、さすがの僕も慄然としたことである。ゆめ子に會はなかつたら、僕はその女といふ氣になつて、汽車賃まで出させられて、僕が東京まで同車したといふだけで、飛んだ濡衣を着せられた上に、無論言ひ開きは立つたらうが、一時は東京で藝者屋からの詰問使や、事に依つたら刑事などといふ厭な人間に見舞はれて、ひどい目に會ふまいものでもなかつたのだ。お互ひに眉唾のこと、眉唾のこと。(九年十月、新潮記者の求に應じて)

——この日記を小説『不能者』の作者、葛西善藏に——

友達の印象

佐藤春夫

もう八九年も前のことだが、牛込の白銀町に私の友達が下宿してゐて、それが丁度神樂坂の盛り場に近かつたのと、その同じ下宿には同じサアクルの友達が二三人もゐたので、(友達の名を挙げたいのだが、新潮記者は人間の名が出ると、待つてましたと言はぬばかりに、その右側に黒丸を附ける癖があるので、それを恐れて控へる譯)そこに行くと、屹度多勢の友達に會ふことが出来た、時とすると、人々が車座になつてゐる程、多勢ゐたことも珍しくない。そこに集まるのは、無論みんな若い人たちばかりだつたが、その中にどうかするとお山の大将と言ふ格で、徳田秋江がまじるのだつた。

秋江はその頃は可成り窮迫してゐた時だつたと見えて、拾の時分に單物を重ねてゐるや

うな氣がした程、(實際はさうでもなかつたかも知れないが)見すほらしい装をして、文字通り繩のやうな帯を締めて、いつも襟の所が開いてゐるので、瘠せた、肋骨の敷が外から讀めるやうな胸を見せて、その胸の見える懐からいつも片腕を出して、その片腕で、彼の身體よりも太いかと思はれるやうな太いステッキを持つて、(いくら何でも、僕の身體より太いステッキはない、なぞと、秋江よ、怒るなかれ)その白銀町の私の友達の下宿してゐる所へやつて來たものだ。その見たところ、文壇の底の底、裏の裏を通つて來たやうな、疲れた恰好と顔付をしてゐた秋江と、いつも一緒に來る、これは又仕立下つしの久留米餅の小ざつぱりした装をした、その又顔つきと言へば、如何にもこれからすく／＼と芽が延びようとするやうに見える、潑刺たる才氣の迸つた顔をした青年があつた。

「これは三田の佐藤春夫君です、」と言つて秋江はその人が始めてその下宿に彼と共に來た時、人々に紹介した。(その頃、佐藤春夫は何でも三田の學校に關係があつたと見える。)

その時のことは、私はそれだけしか覚えてゐない。それが、流星に後年に至つて一代の

才人と謳はれた人だけあつて、随分前のことだが、丁度黒幕の前に立つた役者の姿のやうに、くつきりと私の記憶の目に残つてゐるのだが、さて思ひ出して筆に上せて見ると、これだけしか覚えてゐない。兎に角、よく秋江と一緒に春夫はその下宿にやつて來たものだと思ひ出してゐるうちに、どうやら私自身も、その同じ下宿の一室に下宿してゐたやうにも思へるし、又その友達の家、私自身がさう思へる程、始終遊びに行つたのかとも思はれる。——記憶力の薄い私は、私自身のことさへそんな譯だから、佐藤春夫のこともその位しか記憶にないのだ。

二

それから二度目の時は——

銀座のパウリスタが、あれは以前何とかいふ待合だつたのをその雜作を買つて改築したので、その二階などは、始めのうちは舊態のまゝで、待合式の小間になつてゐたものだが、それが廣間に改築されて間もなくの頃だつたと思ふ。その頃、私は電車賃が十錢と、珈琲

三杯の代が十五錢と、それにまだ當時はあそこのドーナッツが甘かつたので、それを一箇の代五錢と、都合三十錢あると、屹度あそこの椅子の一つを欲して、半分は珈琲のため、半分は無駄話のために、毎晩でも出かけて行つたものだつた。その頃の私の相手は大抵鍋井克之だつた。

或晩も、彼と二人で往來に面した窓に近い卓子に向ひ合つて珈琲を飲みながら無駄話をしてゐると、その時、私たちとは反對の側にあつた、下からの階段を上つて來た、中折帽に鼻眼鏡、灰色だつたかのトンビを着た、しかし厭味などは少しも感じさせない、而も素晴らしくハイカラな青年があつた。

「おい、」と私は卓子越しに鍋井克之の注意を呼ぶと、彼も既にその方に注意してゐたと見えて、

「あれ、誰？」と克之が聞いた。

「あれが、佐藤春夫だよ！」

「あれか、佐藤春夫？」と克之は更に目を見張つて言つた。その頃既に春夫は『三田文學』に詩などを書いてゐて、(牛込で見た時分にも書いてゐたやうだつたが、) 私たちの間にも、中々の才人だ、と多少敬意を表されてゐたのである。

佐藤春夫は無論その時、私たちがこちらの方の卓子から、彼を認めてゐたとは知らないから、帽子を右手に持つて、心持ち上體を俯向き加減にして、脇見をせずに、その左側の端にあつた階段を上りつめると、そこから右側の端の卓子のところまで整然とした足取で、普通の人が十歩で踏んで行くところを、彼は大股に、六歩か七歩かでのやうに私には見えな、歩いて行つた。

……それから、彼が珈琲を何杯飲んだか、ドーナッツを食つたか、私たちの方が先に歸つたか、彼の方が先に歸つたか、少しも覚えてゐない。私はたゞ、私たちの二三間向ふを佐藤春夫が部屋の左から右に横断した恰好だけしか覚えてゐない。私の頭は實際變な頭だ。

それから、私が或女優のところへ遊びに行つてゐると、そこへ武林無想庵と、その他二人と、佐藤春夫の四人でやつて来た時同座したのが、私が彼を見た第三度目だ。その時の春夫は、遠慮なく言ふと、甚だ影が薄かつたやうに覺えてゐる。何の話をしたか覺えてゐないが、無論彼の口から發した言葉は彼らしい才氣の見えるものだつたらうとは思ふが、可成りそれ等に無想庵の影響が見えたやうにも私は覺えてゐる。その時のことは、唯そんな風に覺えてゐるだけで、春夫の恰好も、言葉も、何一つこれと言つて私の記憶にない。覺えてゐるのは、あの偉大な生臭坊主のやうな感じのする(悪口)つもりではない。無想庵の恰好と言葉との幾分だけ。……

四

その次は、彼が本郷の追分で、新世帯を持つた時分、或友達と二人で訪問した。彼は幾分や、下がつて見えた。私はその時彼の訪問者たる私たちに話した言葉を一つも覺えてゐないが、彼が新細君に向つて、彼女が何か話した時に、「お前にもそんな経験があるんだら

う？ 人間といふものは結局その経験を語るものだといふからなア。」と言つたのと、「そんな心理サイコロジイもあるかなア」と言つて、彼女の方に彼の高い、立派な鼻と、これ又特長のある口髭とを、要するに顔を突き出して、からかつた光景を覺えてゐる。

五

そして、最近に、江口渙の會で彼に會つたのが第五度目である。その時、その席に集まつた濟々たる多士の中で、私には彼が一番目立つてお喋りをしてゐた譯でもなく、際立つてみんなの間を歩き廻つてゐた譯でもないが、否、寧ろもつとも慎ましやかにさへしてゐたやうに見えたが、何故か彼が最も印象的に見えた。彼は既に役者で言へば、一等俳優の面影を持ち出したものと言はねばならぬ。

その會場で、私が江口渙と何か喋つてゐた時に、そこへ佐藤春夫がやつて来て、渙と僕とを七分三分に見ながら、所謂『人見知り』するといつたやうな表情をして、彼が渙に向つて、「宇野君は知つてゐるやうな知らないやうな、紹介して貰ふのも變だが……」と言つた

ので、「やあ知つてる、知つてる。」と私は引取つて答へて、「随分しばらく。もう三四年にもなるかな、君が本郷にゐる時分に會つた切りだつたと思ふ。」と言ふと、「やあ、」と彼は頭を搔くやうな恰好をして、やつぱり渾と僕とを、今度は半分半分にしながら、「あの時分は未だ僕の生活の未定稿の時分だつたので……。」と言つて、そして一等俳優の笑ひ方で笑つた。――

(九。一)

谷崎 精 二

一概に文士詩人と言つて色々だが、大體に於いて、彼等は皆「變り者」と見て差支へない、變り者が皆々文士詩人とは言へないが、文士詩人は皆變り者だと斷言しても、大した間違ひではあるまい。さて、その點に於いて、わが谷崎精二は實に異數の人であるやうに思はれてゐる。さうか知ら？

さうかも知れない。例へば文士詩人以外の社界——役人社界とか、商人社界とか、會社員社界とかに持つて行つて、誰か文士詩人の一人を入れて考へて見ると、大抵早いのは三日、長くて一ヶ月位で排斥されさうなところがある。が、一人谷崎精二ならば屹度ボロを出さずに、うまく彼等と調子を合して行きさうに思はれる點など……

要するに、お互ひに「……が困つた人だ」の部類にはひる人たちであるところの、文士

詩人たちの間にあつて、谷崎精二ほど非難の少ない人はあるまい。屹度この印象欄でも、彼は珍しく謹直な人である。彼は意志の強い人である、彼は自己の信念の厚い人である、彼は圓滿な都會人である、等等等、と執筆者等は筆をそろへて、彼の人となりを賞めるに違ひない、さうに違ひない、僕もさう思ふ者である。

だが、さうだからと言つて、谷崎精二が非變人の名簿に載つてゐるなら、僕はそれを早速取消しに行く者である。詭言を弄するやうだが、僕などは先に言つた文士變人論をもう一段進めて、文士詩人であるには、生れつき變人であることを要する、とさへ考へる者である。その僕は、谷崎精二が十分變人である一端をこゝで紹介しよう。

半分しか彼を知らない人は、彼を徹頭徹尾駄洒落を言つてゐる、尋常の市井の社交家のやうに思つてゐるらしい。また、實際、人が、その中に彼を加へて、三人以上集つた場合彼は徹頭徹尾駄洒落を言つて、興がつてゐるやうに見える。そんな時、彼に一時間沈黙してゐると言ふよりも、三時間喋りつづけてゐる給へといふ方が、彼には遙に樂に違ひない。

ところが、その彼が徹頭徹尾寡黙家になる場合が二つあるのだ。その一は、彼が自分の家に客を迎へた場合と、その二は人数が彼を合して二人の場合とである。變な男ではないか？　そして第一の場合では一たび彼と共に一歩彼の家の門を出ると、忽にして彼の喧しい饒舌が始まるのだ。又第二の場合では、二人のところへ誰か一人加はつて、三人になると忽にして彼の普段の饒舌が始まるのだ。

全く、この通りなのである。變り者ではないか？

ところが、彼の小説を見ても分る通り、實のところ、彼は過分に孤獨の士で、過分に孤獨を愛する士で、そして中々のセンチメンタリストである。或時なども、彼を合して三四人で酒を飲んで、それから彼も僕も同じ牛込の住人であるから、二人で同じ道を歸つて來ると、忽にして彼は無口になつてしまつた。その時どんな話をしたか忘れたが、多分話は何でもない話だつたが、夜更の神樂坂を歩きながら、ほつり／＼とした彼の話の調子が、無論センチメンタルな言葉は用ひなかつたが、今し方までのがむしやらかな饒舌家とは人間

が變つたとか思はれる程、妙にセンチメンタルになつたので、同じく大根はセンチメンタルであるところの僕を、涙ぐましい氣持にさせたことであつた。彼の小説のセンチメンタリズムを非難する人も、屹度彼の人間のセンチメンタリズムには心をひかれるであらう。

好漢といふ言葉は、文壇に於いて江口渙のために獨占せらるべきものではなく、江口渙と谷崎精二とを、僕の知る限りでは、僕は推す者である。不幸にして、好漢好漢と目下議論合はず神様がこの二人の好漢を親友にしないのは残念である。

つひ先達のことである。夕方精二が僕の下宿にやつて来て、二人で無駄話をしてゐるところへ、女中が夕刊新聞を持つて来た。見ると、東海道線に汽車の衝突があつて、神戸の内田といふ成金が災難に遭つたといふ記事が出てゐた。その時に同車してゐた遭難客の一人、新井とかいふ人の話として、突然異様な音がしたかと思ふと、身體がはね上げられたとか、はね落されたとか、何かの下敷になつたとかした時、ふとその人の傍で、「俺は神戸の内田だ、金はいくらでもやる。助けてくれ！」と言つたといふやうなことが書いてあつ

た。僕は不聞にして、神戸の内田とか、内田信哉(?)とかいふ名をその時迄知らなかつたので、それを讀みながら、「内田といふのは何者だ？」と聞いて、精二に笑はれた。それは餘談として、結局二人でその新井といふ人が、その時内田に「君は内田君か？ こんな場合いくら騒いだつて仕様がなから、落着いて、二人で聲を合して、救助を求めようぢやないか、」と誠めたといふ話を、大いに痛快がつたことであつた。

さて、前にも言つたやうに、恐らく谷崎精二ほど非難の少ない人はないだらうと僕は思ふので、こゝで思ひついたまゝに一つ、彼の缺點らしいものを挙げようとして、この内田成金の話をしたのだが、わが谷崎精二も、何かの場合には、「俺は谷崎精二だ、俺は谷崎精二だ、」と日頃の謹みを忘れて、叫びさうなところがあるやうに思はれる。但、一寸斷つておくが、僕は先の、内田成金をやり込めた、新井君の言葉をも痛快とも思ふものではあるが、それと同時に世間の外の人々と違つて、この成金内田の心根を生意氣と思はないばかりか、案外子供らしい、根の正直な男だと思つて、微笑みもしたのである。そこで、精二と